

岩手県埋文センター文化財調査報告書第14集

栗石町 下平遺跡 高校西遺跡

(昭和52年度調査)

(財)岩手県埋蔵文化財センター
建設省岩手工事々務所

序

県内の交通量は年毎に増大し、国道46号線も、秋田県とを結ぶ動脈として、仙岩トンネルの開通により、その役割を増しております。この46号線の整備は、岩手郡雫石町の市街地通過のため、十分な機能を発揮でき得ないでおります。これの解消のため、建設省岩手工事々務所において、雫石バイパス建設工事に着手いたしました。

雫石バイパス建設予定地内遺跡は、雫石町下平遺跡、高校西遺跡の二ヶ所で、いずれも岩手県埋蔵文化財センターが委託を受けて調査いたす事となり、昭和52年度雫石町下平遺跡、昭和53年度、雫石町高校西遺跡を調査いたしました。

雫石町は、雫石川流域に発達した土地であり、縄文時代からの遺跡が数多く存在、過去にも多くの調査が行なわれ、塩ヶ森遺跡の縄文時代大住居址、熊野橋遺跡の縄文時代早期土器、桜沼遺跡の縄文時代晩期敷石住居址等多大な成果をあげているところであります。

今回の下平遺跡調査においては、縄文時代陥し穴状遺構が18基並列して検出され、県内において例を見ないところであります。又、中世竪穴住居址が発見されるなど、その文化の多様性を改めて感じさせるところであります。

本報告刊行に当り、広く関係者に活用されると共に、文化財保護の一助となる事を願い、当埋蔵文化財センターに対する各位のご指導を切望する次第であります。

昭和55年12月

(財) 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 新里 盈

目 次

〈下平遺跡〉

序.

I. 調査に至る経過	2
II. 遺跡の位置、地形	4
III. 調査の方法	6
IV. 標準層位	6
V. 検出遺構	9
1. 堅穴住居址	9
D I-1 住居址	9
E II-1 住居址	9
2. 掘立柱建物跡	10
D I-2 掘立柱建物跡	10
3. 溝跡	10
4. ビーカー形ピット	10
B II-1 ビーカー形ピット	10
5. 陥し穴状遺構	11
B I-1 陥し穴状遺構	11
B II-1 陥し穴状遺構	11
C I-1 陥し穴状遺構	11
C I-2 陥し穴状遺構	11
C I-3 陥し穴状遺構	11
C I-4 陥し穴状遺構	11
C I-5 陥し穴状遺構	12
C I-6 陥し穴状遺構	12
C I-7 陥し穴状遺構	12
C I-8 陥し穴状遺構	12
C I-9 陥し穴状遺構	12
C I-10 陥し穴状遺構	13
C I-11 陥し穴状遺構	13
C I-12 陥し穴状遺構	13

C I—13陥し穴状遺構	13
D I—1 陥し穴状遺構	13
D I—2 陥し穴状遺構	14
D I—3 陥し穴状遺構	14
D I—4 陥し穴状遺構	14
D I—5 陥し穴状遺構	14
D I—6 陥し穴状遺構	14
D I—7 陥し穴状遺構	15
D I—8 陥し穴状遺構	15
D I—9 陥し穴状遺構	15
D I—10陥し穴状遺構	15
D I—11陥し穴状遺構	15
D I—12陥し穴状遺構	15
D I—13陥し穴状遺構	16
D I—14陥し穴状遺構	16
D I—15陥し穴状遺構	16
D I—16陥し穴状遺構	16
D I—17陥し穴状遺構	16
D I—18陥し穴状遺構	17
D I—18陥し穴状遺構	17

VI. 出土遺物 17

1. 土器 17

台付鉢形土器 17

深鉢形土器 17

深鉢形尖底土器 18

出土土器片 18

2. 石器 18

石皿 18

籠状石器 19

磨石 19

サイドスクレーパー 19

Ⅶ. まとめ	19
Ⅷ. おわりに	23

図 版 目 次

図版 1. 遺跡位置図	3
図版 2. 標準層位模式図	7
図版 3. 遺跡周辺地形図	8
図版 4. 下平遺跡遺構配置図	26
図版 5. 土層断面図	27
図版 6. 竪穴住居址平面、断面図	28
図版 7. 掘立柱建物跡平面、断面図	29
図版 8. ビーカー形ピット平面、断面図	30
陥し穴状遺構平面、断面図	30
図版 9. 陥し穴状遺構平面、断面図	31
図版10. 陥し穴状遺構平面、断面図	32
図版11. 陥し穴状遺構平面、断面図	33
図版12. 陥し穴状遺構平面、断面図	34
図版13. 陥し穴状遺構平面、断面図	35
図版14. 出土土器実測図	36
図版15. 出土土器片拓影図	37
図版16. 出土石器実測図	38

写 真 図 版 目 次

写真図版 1. 下平遺跡全景	39
写真図版 2. E II-1 竪穴住居址	40
E II-1 竪穴住居址石囲い炉	40
写真図版 3. D I-1 竪穴住居址	41
D I-2 掘立柱建物跡	41
写真図版 4. ビーカー形ピット	42
陥し穴状遺構並列状況	42

写真図版 5 . 陥し穴状遺構	43
写真図版 6 . 陥し穴状遺構	44
写真図版 7 . 陥し穴状遺構	45
写真図版 8 . 陥し穴状遺構	46
写真図版 9 . 陥し穴状遺構	47
写真図版10 . 陥し穴状遺構	48
写真図版11 . 出土土器	49
写真図版12 . 出土土器片	50
写真図版13 . 出土石器類	51

〈高校西遺跡〉

I . 遺跡の立地	54
II . 調査の方法	54
III . 標準層位	54
IV . 調査の結果	55

図 版 目 次

図版 1 . 遺跡位置図	53
図版 2 . 標準層位模式図	55

下 平 遺 跡

1. 遺跡所在地 岩手県岩手郡雫石町23地割字下平
2. 事業主体 建設省岩手工事々務所
3. 事業名 国道46号線雫石バイパス建設
4. 調査主体 (財)岩手県埋蔵文化財センター
5. 調査担当者 主任専門調査員 金沢光孝 専門調査員 高橋文夫
技師 三浦謙一
6. 調査期間 昭和52年9月1日～12月5日
7. 調査対象面積 12,000㎡
8. 発掘面積 6,000㎡
9. 遺跡記号 S D 77
10. 協力機関 雫石町教育委員会

I. 調査に至る経過

岩手郡雫石町は、秋田県と奥羽山脈で接し、古くから仙岩峠を中心とした秋田県との往来の要所であり、縄文時代からの遺跡を多く存する地域でもある。

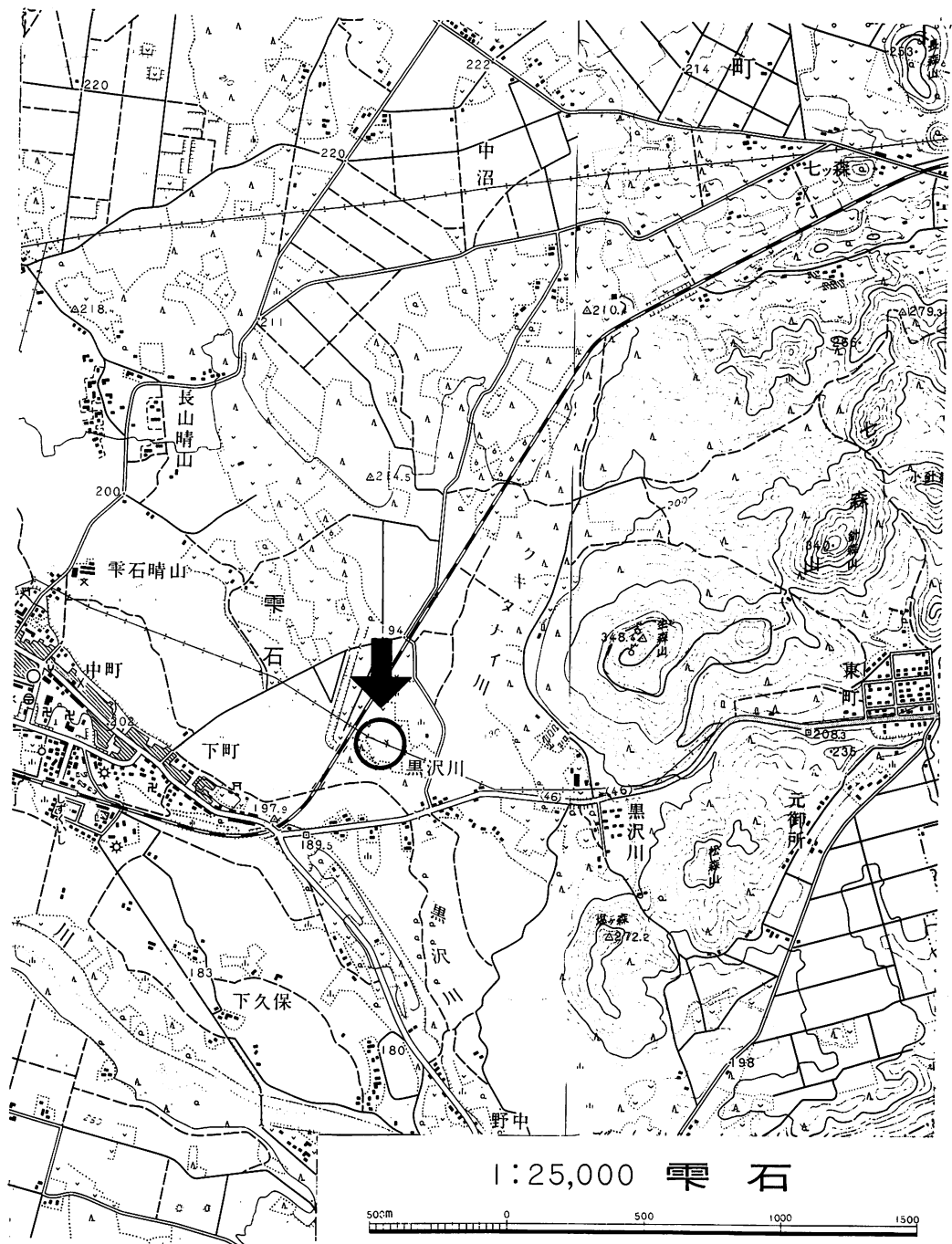
この雫石町にも開発の波が押し寄せ、建設省による御所ダム建設が昭和47年より始まり、それに伴って、関連遺跡の調査が、昭和48年から岩手県教育委員会文化課によって行なわれ、雫石町においても塩ヶ森遺跡、熊野橋遺跡等が調査されている。

昭和51年末に仙岩トンネルが開通し、又、東北縦貫自動車道が開通し、国道46号線の通過車両が増大し、雫石町中心部の交通渋滞は日増しに激しくなり、狭隘の台地上に立地する街並は道路拡幅の余地を残しておらない。このため、建設省によって、雫石町中心部を北に迂回する国道46号線バイパス建設が計画され、昭和51年より実施に移された。

このバイパス計画に従って、岩手県教育委員会文化課によって、ルート内の分布調査が行なわれ、2ヶ所の遺跡が確認された。この2ヶ所の下平遺跡、高校西遺跡の調査についての協議は建設省岩手工事事務所と県教委文化課との間に進められ、昭和52年度、53年度の2ヶ年に行うこととなった。

調査は、昭和52年4月に設立された(財)岩手県埋蔵文化財センターに委託され、調査の細部については、昭和52年5月以降に、建設省岩手工事事務所と(財)岩手県埋蔵文化財センターとの間で協議を重ね、工事計画との調整、現地確認などを行ない、昭和52年度は、ルート内東端の下平遺跡を8月から調査を行ない、11月中に調査面積の50%を完了する事とし残りの50%及び、高校西遺跡は53年7月を目途に完了することで合意した。但し、下平遺跡については、遺構検出までは52年度中に完了し、遺構の存在が薄い場合は全面精査することとした。調査は、西側の国鉄田沢湖線を跨ぐ地区から開始したが、遺構、遺物共になく、調査は東側へと進み、調査区域中央部から東側に、旧段丘面があらわれ、遺構も、東側段丘面に集中することが判明した。これらの遺構の分布状態から、年内調査完了が可能であることが判断されたため、急遽、県教委文化課と協議し、下平遺跡を全面精査することとし、建設省岩手工事事務所の了解を得た。従って、昭和53年度の調査は高校西遺跡のみとなり、予定期間も短縮される事となった。

高校西遺跡は、ほとんど、雫石高校々庭造成時に煙滅しており、一部分の残存しか認められなく、約2ヶ月の予定で、昭和53年4月から調査に取り組んだが、全く遺構の存在が認められずに、縄文土器細片10数片の出土だけであった。



図版1 下平遺跡位置図

この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の25万分の1地形図を複製したものである。

(承認番号) 昭54東複、第84号

Ⅱ．遺跡の位置と地形

下平遺跡は、岩手県岩手郡雫石町32地割字下平にある。雫石町は盛岡市の西16kmの国道46号線に沿い、下平遺跡は雫石町役場の東1.2kmの七ツ森と総称される小規模な山群の西方に位置し、雫石川の一支流である黒沢川の左岸の低位段丘に載っている。段丘の南側には、北西から南東方向にかけて帯状に沖積平野が広がっている。沖積平野の間には黒沢川に合流する数条の小河川が流れ、遺跡の立地するのはその合流点近くにあたり、黒沢川にゆるやかに連続する崖線沿いである。

遺跡の載る地形面は、洪積低位段丘に相当する。雫石町内における地形調査によれば、洪積低位段丘は最低二つの面に細分することが可能である。当地域周辺の洪積低位段丘は、盛岡段丘と一括した名称で呼ばれている。いま、この二つの細分可能面をそれぞれ盛岡段丘古期面、盛岡段丘新期面と仮称する。これを中川久夫ら（1963）の調査した盛岡～花巻間の洪積段丘と対比すると、盛岡段丘古期面は花巻段丘に、盛岡段丘新期面は都南段丘（飯岡野段丘）にそれぞれ相当するものとなる。

当地域の盛岡段丘は、スコリアとパミスで構成される薄層のいわゆる小岩井浮石によって被覆され、また、洪積中位段丘以上の高位面に載るいわゆる洪民火山灰（小岩井浮石とは不整合をなす）を欠いているので、沖積段丘と洪積中位段丘以上の面との区別は比較的容易に行なうことができる。ただし、この小岩井浮石は薄層であるために、当地域周辺ではその多くが浸食によって流出し、降下時の原形をとどめている箇所は少ない。

調査の進展に伴って、黄褐色土層上面を検出したところ、崖線沿いに孤状の凹地形が断続的に2条検出された。そこで深掘トレンチを設定し断面観察の結果、この凹地形は旧河道的なものではなく、2つの自然堤防が段丘にへばりつくような形で分布していることが明らかになった。

いまここで段丘面をT.P、旧自然堤防の古いものをNL-I、旧自然堤防の新しいものをNL-IIと表現すると、T.P→NL-I→NL-IIというように地形発達を図式化できる。深掘りトレンチでの観察では、T.Pの堆積物中にはいわゆる小岩井浮石は存在せず、それが見られるのは黄褐色土層の上位に載る黒褐色土層中である。同様にNL-Iの堆積物中にも小岩井浮石は入っていない。

NL-II堆積物中のスコリアやパミスは層状をなさず、粒子が堆積物中にまんべんなく散布するという在り方を示している。パミスの粒径は1mm±～2mm±である。このようなスコリアやパミスの在り方からNL-II堆積物中の小岩井浮石は降下中に運搬されたか、また、降下後

に再堆積したものであることが知られる。そこで下平遺跡の地形発達史の中に小岩井浮石の降下を組み込んで考えると、その形成は古い方から順に、

$$T.P < NL - I < \text{小岩井浮石} \leq NL - II$$

ということになるであろう。つまり下平遺跡において遺構の存在する地形図面、盛岡段丘新期面に相当し、スコリアとパミスから構成されるいわゆる小岩井浮石は、新期面が形成されるその最終段階に降下しているということである。

周辺遺跡一覧表

遺跡名	時代	場所	備考
堀割遺跡	縄文早	雫石町第15地割下町字古館	貝殻文土器片採集
下町遺跡	縄文中	雫石町下町第15地割	土器片、フレークを採集
雫石城址	城址	雫石町下町第10地割	中世～近世初期（戸沢氏、雫石氏）
桜沼遺跡	縄文晩	雫石町第42地割名子	昭和49年に一部調査（一部保存）
名子Ⅱ遺跡	縄文晩、土師器	〃	土器片、石器片、土師器片を採集
名子Ⅰ遺跡	縄文早・前・後	〃	繊維土器片その他を採集
七つ森遺跡	縄文？	雫石町第21地割長畑	地主談によると開田の際土器が出たとか
塩ヶ森Ⅴ遺跡	縄文、土師器	雫石町繫第5地割字塩ヶ森	縄文土器片、土師器片を採集
塩ヶ森Ⅵ遺跡	縄文早・前、平安	〃	繊維土器片、須恵器片を採集
塩ヶ森Ⅶ遺跡	縄文	〃	フレーク片を採集
桜松遺跡	縄文早・前、平安	雫石町第18地割字桜松	昭和51年にダム関連で一部調査
野中遺跡	縄文前・後	雫石町第13地割字明神	昭和48年にダム関連で一部調査
下長根遺跡	縄文前・後	〃	完形土器が出土
長根遺跡	縄文中	雫石町第15地割字長根	土器片、フレーク片を採集

「雫石町史」昭和54年1月発行より

Ⅲ. 調査の方法

本発掘調査は国道46号線雫石バイパス建設工事に伴って行なわれる緊急事前調査であるため、調査範囲はバイパス建設予定区域に限定された。

遺跡のほとんどは畑地であり、分布調査では土器片が採集されており、段丘の地形上からも遺構の存在が考えられる国鉄田沢湖線をはさむほぼ12,000m²の区域を調査対象区域として設定した。

調査にあたっては、層位に従って土の除去を行なうこととし、でき得る限り大きな範囲を遺

跡の面としてとらえるため、バックホーを導入して表土を除去し、遺構または遺物包含層が検出された場合は人力に切り替えることとした。この結果、遺構の検出されるのは遺跡北東部の黄褐色シルト面に限られ、沖積面からは遺構は検出されなかった。

座標軸の設定にあたっては、遺構が存在すると考えられる約6,000㎡の範囲に建設省岩手工事事務所の測量したセンター杭を基点に東西の基準線を設定し、これによって30mの大区画を東から順にA B C D E Fのアルファベットを付し、南北方向には同様に北側からⅠⅡⅢのローマ数字をふり、これらの組み合わせで区画名とした。この30mの大区画をさらに南北、東西方向に10等分し、3m×3mのグリッドを設定してこれを調査の基本単位とした。このグリッドには北側から0～9までの番号、西からa～jまでのアルファベットを付してグリッド名とした。

実測にあたっては、遺構の検出された地区に3m×3mの遣り方を設定して、遣り方測量を行なった。縮尺は遺構については20分の1を基本単位としたが、炉および土器の出土状況等は10分の1の縮尺とした。また、遺構の検出される地区は、ほぼ50cmの間隔でレベルの計測を行なった。

Ⅳ. 標 準 層 位

調査区域の洪積面、沖積面の標準層位は次の通りである。洪積面の層厚は北側部分のものであり、南側の崖線沿いでは、第Ⅴ層より上位の地層は漸次層厚を減じている。沖積面の層厚は北側部分、南側部分ともほぼ同一である。

沖積面

第Ⅰ層（クロボク層） 層厚20cm±～30cm±の腐植土層で、全体に締りがなく、粘性も少ない。耕作による攪乱を受けている。

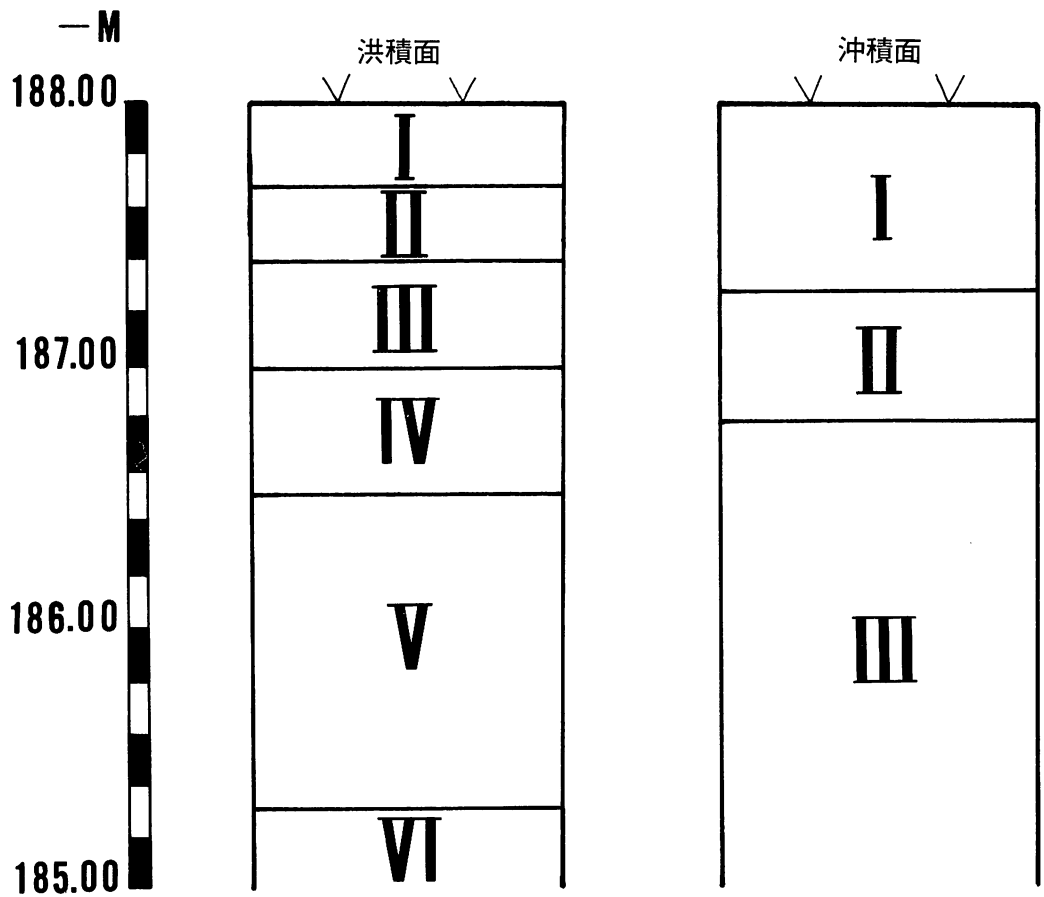
第Ⅱ層（黒褐色土層） 層厚20cm±～30cm±であるが、厚い所では50cm±に達する。炭化物微粒が僅かに含まれている。出土遺物はほとんどこの層中に含まれていた。

第Ⅲ層（明褐色土層） シルト質土で、層厚は15cm±～20cm±である。粘性があり、よく締っている。陥し穴状遺構は、この層の上面を確認面としている。

第Ⅳ層（黒褐色土層） 層厚は30cm±～45cm±で、微細なスコリアやパミスの粒子が含まれている。

第Ⅴ層（黄褐色土層） シルト質土～粗砂で、層厚は120cm±である。下部は粘土質シルト土が占めている。中部に細砂が帯状に不連続に堆積している。

第Ⅵ層（砂礫層） 層厚は200cmを越すと考えられる。径5cm±の垂円～円の形状の安山岩



図版2 標準層位模式図

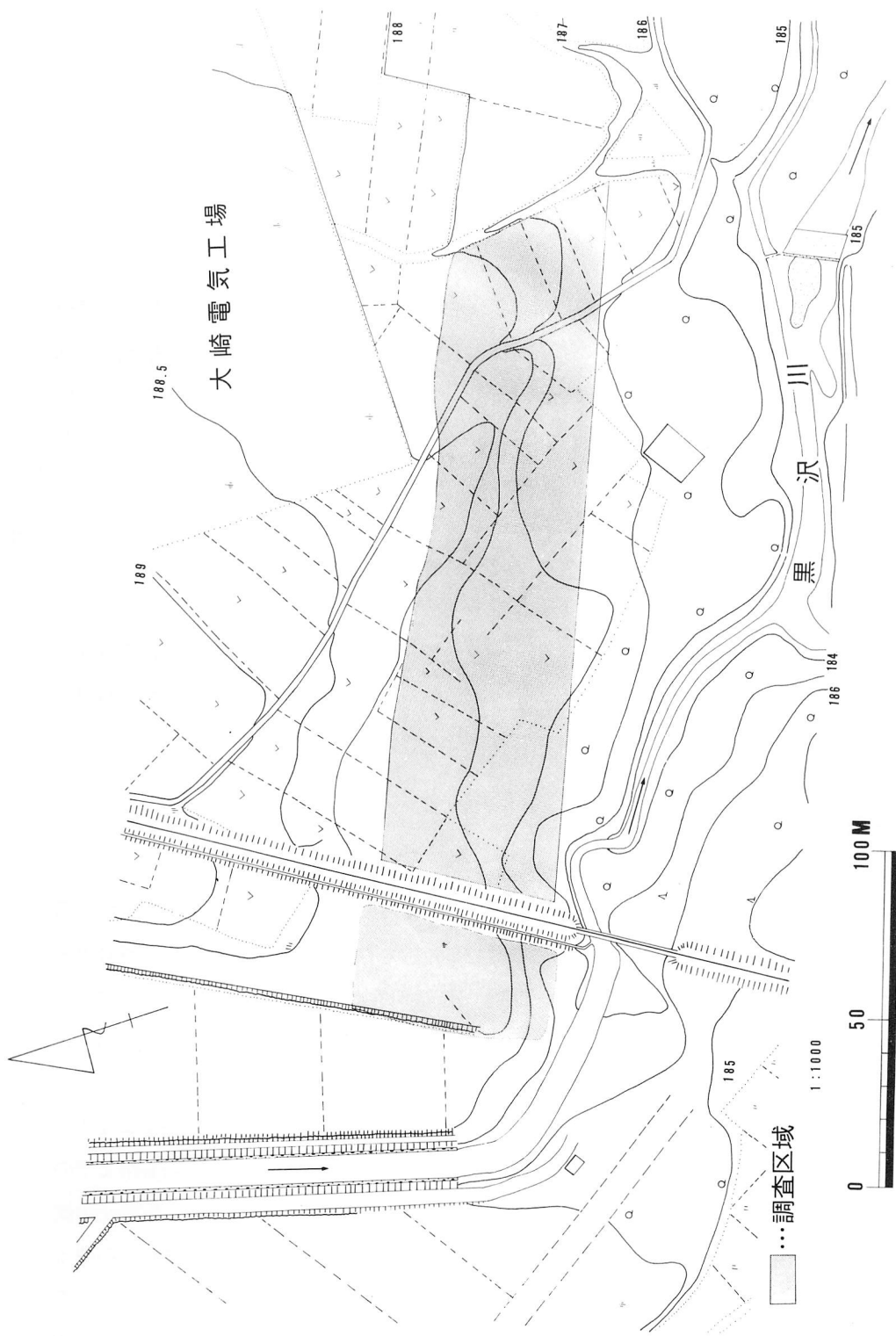
礫が主体となっているが、まれに人頭大の礫も含まれている。

沖積面

第Ⅰ層（クロボク層） 腐植土層で、70cm±の層厚がある。耕作による攪乱を激しく受けている。

第Ⅱ層（暗褐色土層） 層厚は50cm±である。層厚1cm±の灰白色の未記載のテフラが狭在している。数枚の水酸化鉄の盤層や高師小僧が含まれている。

第Ⅲ層（砂礫層） 径2cm±～5cm±の亜円～円の安山岩礫が主体となっている。



図版 3 下平遺跡周辺地形図

V. 検 出 遺 構

1. 竪穴住居址

D I—1 住居址 (図版6ab 写真図版3a)

東西3.2m±、南北3.1m±の方形の形状を示す住居址である。埋土は炭化物、焼土の微粒を僅かに含む暗褐色土層で構成されている。壁高は北壁で37cm±、南壁で21cm±、東壁で38cm±である。床面は堅緻であるが全体に凹凸が激しく、中央部から西壁にかけてはゆるやかに傾斜している。柱穴は北壁際のP₁(径36cm±・深さ30cm±)・P₂(径32cm±・深さ22cm±)・P₃(径34cm±・深さ39cm±)、南壁際のP₄(径36cm±・深さ48cm)、P₅(径34cm±・深さ22cm±)P₆(径34cm±・深さ47cm±)がほぼ等間隔に配置されている。

床面のほぼ中央部に18cm±×10cm±の範囲で僅かに焼成を受けた箇所があるが、攪乱を受けており、炉としての機能をもったものか否かは不明である。

西壁中央部に幅40cm±の出入口の施設と考えられる張り出しを伴い、その中央部に径21cm±の円盤形の安山岩礫が埋置されている。この張り出し部分は全体に外側からゆるやかに傾斜している。

東壁に沿って幅20cm±・深さ15cm±の周溝が巡っている。

床面からは遺物は出土していない。

E II—1 住居址 (図版6c 写真図版2ab)

残存する壁は北壁のみであるため、規模の詳細は不明であるが、ほぼ円形の形状を示す住居址と考えられる。埋土は焼土および炭化物の微粒を多量に含む黒褐色土層であるが、単層であるため土層断面図の作成は行なわなかった。北壁の壁高は12cm±で、床面は全体にゆるやかに西側に傾斜している。柱穴を構成すると考えられる小ピットは検出されず、柱配置は不明である。

炉は8個の安山岩礫で構成される石囲い炉で、直立埋設土器を伴い、住居址中央部よりやや北に寄って位置している。炉縁径は22cm±×23cm±を計り、床面から直立埋設土器底部までの深さは37cm±である。炉は全体にあまり焼成をうけていない。炉の東側に74cm±×78cm±の範囲に亘って焼土が拡がり、南東側にも73cm±×51cm±の範囲に焼土がみられる。これらの焼土と炉を含む140cm±×170cm±の範囲に炭化材がほぼ放射状の拡がりをして存在する。この炭化材と焼土から、この住居址は焼失家屋であると考えられる。北壁際床面上に径7cm±～10cm±の垂円～円の安山岩礫が7個存在するが、これらの礫が壁の崩落を防ぐ機能をもったもの

か否かは不明である。

住居地の北東寄りの床面から鉢型土器がほぼ直立に埋設された状態で出土した。

この住居地は北側で段丘の崖線に沿って巡る溝によって切られている。

2. 掘立柱建物跡

D I - 2 掘立柱建物跡 (図版7 写真図版3b)

D I - 1 住居地に隣接する東西棟である。規模は1間×2間で、梁行2.2m、桁行2.7mを計り、東側に庇を伴っている。柱穴は円形、不整形円形、楕円形等の平面形を示し、径30cm±~60cm±、深さ30cm±~40cm±である。柱あたりはみられない。P₁₀、P₁₁の柱穴は柱筋にのらず縄張り段階においてP₇、P₈に掘り直され、廃棄されたものと考えられる。

3. 溝跡

E I 区からF II 区にかけて段丘の西側崖線にほぼ沿って検出された。北端は調査区域外に入るため不明であるが、南端はE II - 1 住居地を切っている。規模は巾30cm±~62cm±、深さ14cm±~37cm±で、長さは29cm±である。溝の埋土は黒褐色土層のほぼ単一層で、溝縁はほとんどが廃棄後の崩壊作用により不整形を呈している。

埋土および底面からの遺物の出土は無く、時期、機能は不明である。

4. ビーカー形ピット

B II - 1 ビーカー形ピット (図版8ab 写真図版4a)

規模は開口部径104cm±、底部径110cm±で、深さは61cm±を計る。確認面は第Ⅲ層上面である。北壁は開口部で僅かに内傾し、中層部からはほぼ垂直におりる。南壁は開口部から垂直におり、中層部で僅かに張り出したのち底部まで垂直におりる。埋土は北側過半部を焼土微粒の混入するクロボク層が占め、南壁際は主に焼土微粒の混入する褐色土層である。底面はほぼ平坦である。

遺物は出土していない。

5. 陥し穴状遺構

(註) 陥し穴状遺構の記述は、次の方法に依った。

1. 規模の数値は、開口部の計測値を優先させ、底面の計測値は()内に示した。
2. 深さは、中央部の計測値である。
3. 長軸の方位は、磁北を基にしたものである。

B I—1 陥し穴状遺構 (図版8abch 写真図版5a)

300(257)cm±×40(18)cm±の規模をもち、深さは40cm±を計る。確認面は第Ⅲ層上面である。長軸はN—46°—Wの方向を示す。埋土は開口部を暗褐色土層が占め、中層部は主に黒褐色土層である。下層部は暗褐色土層と底面を覆う黒褐色土層で構成されている。東西両壁ともに開口部から傾斜しており、中層部からはほぼ垂直におりて底部に至っている。底面はほぼ平坦である。

B II—1 陥し穴状遺構 (図版8dg 写真図版5b)

328(332)cm±×26(11)cm±の規模をもち、深さは41cm±を計る。第Ⅲ層上面で確認された。長軸はN—64°—Eの方向を示す。埋土は粘性のある黒褐色土層の単層である。南北両壁ともに開口部から僅かに傾斜して下り、底部で窄まる形状を示す。東端部と西端部の下部は奥に挟り込まれている。底面は丸底状を呈している。

C I—1 陥し穴状遺構 (図版8ef 写真図版5c)

本遺構の北東側の過半数は調査区域外に入っているため、全体の規模、形状は不明であるが、調査部分における短軸は43(18)cm±、深さは43cm±である。確認面は第Ⅲ層上面である。埋土はしまりのある黒褐色土層のほぼ単一層であるが、中層部に暗褐色土がブロック状に混入している。北壁、南壁ともに開口部から僅かに傾斜して底部におりている。底面はほぼ平坦である。

C I—2 陥し穴状遺構 (図版8im 写真図版5d)

本遺構の北東側部分は調査区域外に入っているため、全体の規模、形状は不明であるが、調査部分の短軸は21(13)cm±、深さ41cm±である。埋土は開口部にクロボク層、黒褐色土層が入り組んで堆積し、中層部～下層部は褐色シルト土がブロック状に混入する黒褐色土層である。北壁、南壁ともに開口部から傾斜して下り、中層部からはほぼ垂直におりて底部に至っている。底面はほぼ平坦である。

C I—3 陥し穴状遺構 (図版8jk 写真図版5e)

本遺構の北東側部分は調査区域外に入っているため、全体の規模、形状は不明である。調査部分の短軸は41(15)cm±、深さは60cm±である。埋土は開口部が主にクロボク層で、その下位を黒褐色土層が占め、中層部～下層部は褐色シルト土がブロック状に混入する黒褐色土層である。北壁は開口部から僅かの傾斜をもって底部に至り、南壁は中層部で僅かに丸味をもってい

る。底面はほぼ平坦で、西端下部は奥に挟り込まれている。

C I—4 陥し穴状遺構 (図版8en 写真図版6a)

330(350)cm土×32(14)cm土の規模をもち、深さ86cm土を計る。確認面は第Ⅲ層上面である。長軸はN—28°—Eの方向を示す。埋土は開口部を褐色土層が占め、中層部は暗褐色土層、褐色土層、クロボク層が乱雑に入り組み、下層部は褐色土層とクロボク層が占めている。底面を覆うクロボク層には、微量の焼土微粒が混入している。北壁、南壁はともに開口部で僅かに傾斜したのち、ほぼ垂直におりて底面に至っている。底面はほぼ平坦で、東西両端下部は奥に挟り込まれている。

C I—5 陥し穴状遺構 (図版9ae 写真図版6b)

300(310)cm土×62(13)cm土の規模で、深さ123cm土を計る。第Ⅲ層上面で確認された。長軸はN—62°—Eの方向を示す。埋土は開口部を焼土微粒、炭化物微粒が僅かに混入するクロボク層が占め、その下位は褐色シルトがブロック状に混入する黒褐色土層である。中層部より下層部にかけては柔らかく粘性のある褐色土層が占めている。南壁は開口部から傾斜して下り、中層部上位から底部までほぼ垂直におりている。北壁は開口部からゆるやかに傾斜して下り、中層部下位からはほぼ垂直におりている。底面はほぼ平坦で、西端下部は奥に挟り込まれている。

C I—6 陥し穴状遺構 (図版9bc 写真図版6c)

423(432)cm土×48(28)cm土の規模で、深さは72cm土を計る。第Ⅲ層上面において確認された。長軸はN—54°—Eの方向を示す。埋土は上層部を焼土微粒、炭化物微粒が僅かに混入する褐色土層が占め、中層部は主に黄褐色土層で、下層部は黒褐色土層中に暗褐色土層が凸レンズ状に入り込む堆積状態を示している。北壁、南壁ともに開口部よりほぼ垂直におりて、底部で僅かに傾斜して底面に至っている。底面はほぼ平坦で、東端下部は奥に挟り込まれている。

C I—7 陥し穴状遺構 (図版9df 写真図版6d)

280(302)cm土×46(25)cm土の規模で、深さは84cm土を計る。第Ⅲ層上面で確認された。長軸はN—54°—Eの方向を示す。埋土は上層部に暗褐色土層、クロボク層、褐色土層が入り組み、開口部北壁際から中層部にかけては柔らかい黒褐色土層が占め、下層部は硬く締った褐色土層が占めている。北壁は開口部から傾斜しており、中層部上位からはほぼ垂直におりて底部に至り、南壁は開口部から底部まで僅かに傾斜しておりている。底面は平坦で、中央部に比して先端部は狭く、東端部は奥に大きく挟り込まれている。

C I—8 陥し穴状遺構 (図版9gh 写真図版6e)

290(310)cm土×56(22)cm土の規模で、深さは139cm土を計る。第Ⅲ層上面において確認された。長軸はN—86°—Eの方向を示す。埋土は開口部が焼土微粒の混入する黄褐色土層で、その下位をクロボク層が占める。中層部は粘性のある褐色土層で、下層部は暗褐色土層、明褐色土

層が入り組み、最下層は1mm～2mmの砂礫の混入する黒褐色土層である。壁は北壁、南壁ともに開口部から僅かの傾斜をもって下り、下層部で傾斜を強めたのち、ほぼ垂直におりて底面に至っている。底面は平坦で、東西両端の下部は奥に挟り込まれている。

C I—9 陥し穴状遺構 (図版9ij 写真図版6f)

330(318)cm±×21(12)cm±の規模で、深さは43cm±を計る。確認面は第Ⅲ層上面である。長軸はN—46°—Wの方向を示す。埋土は褐色土層の単層であるが、上層部は柔かく、下層にいくにしたがい硬くしまる。東壁、西壁ともに開口部から僅かに傾斜して底部に至っている。底面はほぼ平坦である。

C I—10 陥し穴状遺構 (図版9kl 写真図版7a)

300(285)cm±×20(9)cm±の規模で、深さは41cm±を計る。第Ⅲ層上面において確認された。長軸はN—34°—Wの方向を示す。埋土はクロボク土がブロック状に混入する褐色土層の単層である。東西両壁ともに開口部から僅かに傾斜しており、下層部からはほぼ垂直におりて底部に至っている。底面は丸底状を呈している。

C I—11 陥し穴状遺構 (図版10ab 写真図版7b)

240(260)cm±×50(24)cm±の規模で、深さは75cm±を計る。第Ⅲ層上面において確認された。長軸方向はN—50°—Eの方向を示す。埋土は上層部が焼土微粒の混入するクロボク層、中層部は黒褐色土層、下層部は砂礫の混入する褐色土層の3層で構成され、中層部に明褐色～橙色のシルト層が堆積する。北壁は開口部でふくらみをもち、中層部からは僅かの傾斜をもって下り、南壁は上層部、中層部でふくらみをもっておりている。底面は平坦で、東西両端の下部は奥に挟り込まれている。

C I—12 陥し穴状遺構 (図版10ce 写真図版7c)

北東側過半部が調査区域外に入っているため、全体の規模、形状は不明であるが、調査部分の短軸は33(18)cm±、深さは111cm±である。埋土は上層部から中層部にかけて黒褐色土層が占め、東壁際には茶褐色土層が堆積している。中層部東壁際から下層部にかけては黄褐色土層が占めている。東西両壁ともに開口部で僅かの傾斜をもったのちほぼ垂直におりて底部に至っている。底面は平坦で、南端下部は奥に挟り込まれている。

C I—13 陥し穴状遺構 (図版10df 写真図版7d)

北東側過半部が調査区域外に入っているため、全体の規模、形状は不明であるが、調査部分の短軸は32(25)cm±、深さは105cm±である。埋土は上層部が黒褐色土層、中層部が褐色土層とその下位のクロボク層、下層部が褐色土層の4層で構成されている。東西両壁とも開口部から傾斜しており、横断面はV字状を呈している。底面は丸底で、南端下部は奥に挟り込まれている。

D I - 1 陥し穴状遺構 (図版10gi 写真図版7e)

360(366)cm±×50(22)cm±の規模で、深さは97cm±を計る。第Ⅲ層上面において確認された。長軸はN-22°-Wの方向を示す。埋土は上層部が黒褐色土層、中層部は褐色土層および黒褐色土層、下層部は黄褐色土層で構成されている。西壁は開口部から底部まで傾斜しており、東壁は開口部から中層部にかけて僅かにふくらみをもったのち、ほぼ垂直に底部におりている。底面はほぼ平坦で、南北両端の下部は奥に挟り込まれている。

D I - 2 陥し穴状遺構 (図版10hk 写真図版7f)

北側部分が攪乱を受けているため、開口部の長軸径は不明である。底面の長軸は394cm±、短軸56(16)cm±、深さは88cm±である。長軸はN-20°-Wの方向を示している。埋土は上層部から中層部にかけてクロボク層、黒褐色土層、暗褐色土層が入り組み、乱雑な堆積状態を示している。下層部は暗褐色土層が占めている。西壁は開口部から僅かに傾斜しており、中層部から底部まではほぼ垂直である。東壁は開口部から中層部にかけてふくらみをもち、中層部から底部にかけてはほぼ垂直である。底面は西側に僅かに傾斜し、南北両端ともに奥に挟り込まれている。

D I - 3 陥し穴状遺構 (図版10il 写真図版8a)

北側部分が調査区域外に入るため、全体の規模、形状は不明であるが、調査部分の短軸は55(22)cm±で、深さは76cm±である。長軸はN-25°-Wの方向を示している。埋土は上層部をクロボク層が占め、その下位に褐色土層が堆積する。中層部から下層部にかけてはクロボク層、褐色土層が入り組み、底面を覆っているのはクロボク層である。西壁は開口部から傾斜しておりたのちほぼ垂直となり、中層部で再び傾斜したのちほぼ垂直におりている。東壁は開口部から中層部まで傾斜しておりたのち、ほぼ垂直におりて底部に至っている。底面はほぼ平坦で、南端は奥に挟り込まれている。

D I - 4 陥し穴状遺構 (図版11ab 写真図版8b)

調査区域内で確認されたのは南端部のみであるため、全体の規模、形状は不明である。調査部分での短軸は46(16)cm±で、深さは93cm±である。長軸はほぼ磁北の方向を示しているものと考えられる。埋土は焼土微粒の混入する黒褐色土層が上層部から中層部を占め、中層部から下層部にかけては、褐色土層、黄褐色土層、褐色土層の3層がほぼ水平の堆積状態を示している。東西両壁ともに開口部で傾斜したのち、ほぼ垂直におりて底部に至っている。底面は西側に傾斜している。

D I - 5 陥し穴状遺構 (図版11cd 写真図版8c)

北側の過半数が調査区域外に入っているため、全体の規模、形状は不明であるが、調査部分の短軸は62(21)cm±、深さは90cm±である。埋土は上層部をクロボク層が占め、中層部は主に

黒褐色土層と褐色土層で構成され、下層部は褐色土層と砂礫の混入する暗褐色土層である。西壁は開口部から底部まで僅かの傾斜をもって下り、東壁は開口部で傾斜したのち、ほぼ垂直におりて底部に至っている。底面は丸底状を呈している。

D I—6 陥し穴状遺構 (図版11ef 写真図版8d)

374(360)cm±×40(16)cm±の規模で、深さは84cm±を計る。第Ⅲ層上面で確認された。長軸はN—21°—Wの方向を示す。埋土は上半部がクロボク層、下半部が主に暗褐色土層で、これに褐色土層、黒褐色土層が入り込む堆積状態を示している。東壁は開口部から底部までほぼ垂直に下り、西壁は開口部で大きく傾斜したのち、僅かの傾斜をもって底部に至っている。底面は西側に傾斜している。

D I—7 陥し穴状遺構 (図版11gh 写真図版8e)

372(336)cm±×64(20)cm±の規模で、深さは97cm±を計る。確認面は第Ⅲ層上面である。長軸はN—15°—Wの方向を示す。埋土は上層部がクロボク層で、開口部東壁際から中層部にかけては暗褐色土層を主体とした褐色土層、クロボク層が入り組み、下層部は硬くしまった褐色土層である。東西両壁ともに開口部より底部まで傾斜して下り、横断面はV字状を呈している。底面はほぼ平坦である。

D I—8 陥し穴状遺構 (図版11ij 写真図版8f)

296(250)cm±×46(16)cm±の規模で、深さは69cm±を計る。確認面は第Ⅲ層上面である。長軸は磁北方向を示している。埋土は上半部が黒褐色土層、下半部が暗褐色土層の2層で構成されている。東西両壁ともに開口部より垂直におり、中層部から傾斜して底部に至る。底面は丸底を呈している。

D I—9 陥し穴状遺構 (図版11kl 写真図版9a)

350(314)cm±×46(18)cm±の規模で、深さは73cm±を計る。確認面は第Ⅲ層上面である。長軸はN—4°—Wの方向を示す。埋土は開口部の中央部をクロボク層が占め、東西両壁際から中層部にかけては黒褐色土層が堆積する。中層部東壁際から下層部にかけては褐色土層、黒褐色土層、黄褐色土層が入り組み、最下層は硬い暗褐色土層である。東西両壁ともに開口部から底部まで傾斜しており、底面は丸底である。

D I—10 陥し穴状遺構 (図版12ab 写真図版9b)

312(284)cm±×36(24)cm±の規模で、深さは80cm±を計る。第Ⅲ層上面で確認された。長軸は磁北を示している。埋土は上半部が黒褐色土層、下半部が褐色土層の2層によって構成されている。東西両壁ともに開口部より傾斜して下り、中層部からはほぼ垂直に下りている。底面は平坦である。

D I—11 陥し穴状遺構 (図版12cd 写真図版9c)

244(250)cm±×32(14)cm±の規模で、深さは68cm±を計る。第Ⅲ層上面において確認された。長軸はN-5°-Eの方向を示す。埋土は北端部で黒褐色土層が開口部より底部までを占めるほかは上層部をクロボク層、中層部を黒褐色土層、下層部を暗褐色土層が占める土層構成である。南北両端の壁はほぼ垂直り下り、底面はほぼ水平である。

D I-12陥し穴状遺構 (図版12ef 写真図版10a)

322(282)cm±×36(18)cm±の規模で、深さは71cm±を計る。第Ⅲ層上面で確認された。長軸はN-3°-Eの方向を示す。埋土は開口部をクロボク層が大きく占め、中層部は主に暗褐色土層である。下層部は褐色土層、黒褐色土層、クロボク層が入り組み、乱雑な堆積状態を示している。南北両端の壁はほぼ垂直に下り、底面はほぼ水平である。

D I-13陥し穴状遺構 (図版12gh 写真図版9d)

320(306)cm±×44(22)cm±の規模で、深さは71cm±を計る。確認面は第Ⅲ層上面である。長軸はN-8°-Wの方向を示す。埋土は開口部を黒褐色土層が占め、中層部は主に褐色～黄褐色土層、下層部はクロボク層と黒褐色土層によって構成されている。東西両壁ともに開口部から僅かに傾斜して下り、下層部からはほぼ垂直に下りている。底面は丸底である。

D I-14陥し穴状遺構 (図版12ij 写真図版9e)

324(322)cm±×53(16)cm±の規模で、深さは94cm±を計る。確認面は第Ⅲ層上面である。長軸はN-7°-Wの方向を示す。埋土は開口部が褐色土層で、その下位を黒褐色土層が占める。中層部は褐色土層、下層部は黄褐色土層と褐色土層によって構成されている。西壁は開口部から傾斜しており、下層部からはほぼ垂直におりる。東壁は開口部で僅かに傾斜し、中層部からは垂直におりて底部に至っている。底面は平坦で、南端下部は僅かに奥に挟り込まれている。

D I-15陥し穴状遺構 (図版13ab 写真図版9f)

318(322)cm±×48(14)cm±の規模で、深さは90cm±を計る。確認面は第Ⅲ層上面である。長軸はN-7°-Wの方向を示す。埋土は開口部を褐色土層が占め、中層部は暗褐色土層、クロボク層、黄褐色土層が入り組み、乱雑な堆積状態を示している。東壁、西壁ともに開口部から底部までゆるやかに傾斜し、横断面はV字状を呈す。底面は平坦で、南北両端の下部は僅かに奥に挟り込まれている。

D I-16陥し穴状遺構 (図版13cd 写真図版10b)

338(314)cm±×48(10)cm±の規模で、深さは87cm±を計る。確認面は第Ⅲ層上面である。長軸はN-5°-Wの方向を示す。埋土は上層部が炭化物微粒、焼土微粒の混入する褐色土層が占め、中層部は主に黒褐色土層である。中層部西壁際から底部にかけては、クロボクがブロック状に混入する褐色土層で、下層西壁際には黄褐色土層が堆積する。東西両壁ともに開口部から底部までゆるやかに傾斜し、横断面はV字状を呈している。底面はほぼ平坦である。

D I—17 陥し穴状遺構 (図版13ef 写真図版10c)

320(300)cm土×58(20)cm土の規模で、深さは81cm土を計る。確認面は第Ⅲ層上面である。長軸はN—12°—Wの方向を示す。埋土は開口部が焼土微粒の僅かに混入する黒褐色土層で、北端部はクロボク層である。中層部は炭化物微粒、焼土微粒が混入する褐色土層が占め、下層部は明褐色土層、褐色土層、赤褐色土層が入り組む乱雑な堆積を示している。南側過半部の底面を覆っているのは、砂礫の多く混入する褐色土層である。底面は中央部で僅かに丸味をもつほかはほぼ平坦である。

D I—18 陥し穴状遺構 (図版13gh 写真図版10d)

352(340)cm土×50(22)cm土の規模で、深さは80cm土を計る。確認面は第Ⅲ層上面である。長軸はN—13°—Wの方向を示す。埋土は開口部が焼土微粒が僅かに混入する黒褐色土層で、開口部北端から中層部を占める褐色土層、中央部の下層部を占める黄褐色土層、底面を覆う黒褐色土層のほぼ4層によって構成されている。底面は南北両端部で凹凸をもつほかはほぼ平坦である。

D I—19 陥し穴状遺構 (図版13ij 写真図版10e)

340(354)cm土×40(18)cm土の規模で、深さは84cm土を計る。第Ⅲ層上面で確認された。長軸はN—64°—Eの方向を示す。埋土は開口部が主に黒褐色土層で、南端は茶褐色土層である。中層部は暗褐色土層、黒褐色土層、褐色土層が入り組み、下層部はクロボク土がブロック状に混入する褐色土層及び砂礫の混入する褐色土層の2層で構成されている。底面は北西端、南東端がせり上がる形状を呈している。

VI. 出土遺物

1. 土器

台付鉢形土器 (図版14b 写真図版11c)

E II—1 住居址の北東壁寄りの床面から出土した。計測値は口径15.6cm、底径 5.6cm、最大径16.8cm、現高10.5cmである。器面は全体に赤褐色を呈している。口径は僅かに内傾し、直線的な胴部を経て底部に続く。台部はほとんど欠損している。口唇は磨耗がはげしいが、羊歯文様の刻みをもつものと考えられ、口縁部の文様帯は、3本の平行沈線と沈線間の羊歯文様である。胴部は斜行縄文を地文とするが、胴下半部に2本の平行沈線をもち、この沈線から底部までは無文である。底部直下の台部にも沈線が施されているが、台部のほとんどが欠損している

ため詳細は不明である。胎土には長石、石英が多く含まれ、僅かに金雲母もみられる。

深鉢形土器 (図版14c 写真図版11d)

E II - 1 住居址の石囲い炉の直立埋設土器である。計測値は口径31.2cm、底径 8.7cm、最大径31.5cm、現高36.2cmで、口縁部は欠損している。にぶい橙色の粗製土器で、焼成は受けていない。器表面全体に斜行する縄文を地文とし、回転結節文がほぼ 5 cm 間隔に水平方向に施文されている。胴部の中央部にすすの付着がみられる。内部は横方向に平滑なナデの技法が施されている。胎土には僅かに金雲母を含んでいる。

深鉢形尖底土器 (図版14a 写真図版11ab)

遺跡北西部の沖積面からの単独出土で、関連する遺構、遺物は検出されていない。計測値は口径23.5cm、最大径23.5cm、器高37.1cmである。にぶい橙色で、砲弾形を呈しているが、口縁部から底部にかけてのほぼ 2 分の 1 は欠損している。口唇は平縁で、直線的な胴部を経て底部で急に窄み尖底に至っている。器表面全体に複節斜行縄文が施され、胴部および口縁部に広い範囲に黒斑がみられる。器表面は全体にかなり磨耗している。胎土には細砂粒を含み、僅かに植物繊維も認められる。内部は粗く、調整はほとんどされていない。

出土土器片 (図版15 写真図版12)

図番号	グリッド	層位	形態の特徴	地文 施文	内面調整	胎土	色調	備考
a	A-Ⅱ	第Ⅱ層	胴部破片	平行波状沈線	横位調整	砂粒が多い	灰白色	中央部に 黒斑 過半部に 黒斑
b	A-Ⅱ	第Ⅱ層	胴部破片	縦位の単節縄文	縦位調整	砂粒、細礫を含む	灰黄色	
c	B-Ⅱ	第Ⅱ層	胴部破片	縄文地文に回転結節文施文	縦位調整	砂粒が多い	にぶい黄褐色	
d	B-Ⅱ	第Ⅱ層	胴部破片	斜位燃紋	横位調整	砂粒、細礫を含む	にぶい赤褐色	
e	B-Ⅱ	第Ⅱ層	胴部破片	沈線を横位から縦位に施文	横位調整	砂粒が多い	赤褐色	すす付着
f	B-Ⅱ	第Ⅱ層	口縁部破片	口唇部は無文、横位の沈線、斜位縄文	横位調整	砂粒が多い	灰白色	
g	B-Ⅱ	第Ⅱ層	胴部破片	縄文地文に斜位の平行沈線を施文	斜位調整	砂粒、細礫を含む	暗褐色	すす付着
h	B-Ⅱ	第Ⅱ層	口縁部破片	縦位の平行細沈線	縦位調整	砂粒が多い	にぶい褐色	
i	E-Ⅱ	第Ⅱ層	胴部破片	縄文地文に回転結節文施文	斜位調整	砂粒が多い	にぶい黄橙色	すす付着
j	E-Ⅱ	第Ⅱ層	胴部破片	縄文地文に回転結節文施文	横位調整	砂粒が多い	にぶい黄褐色	

2. 石器

石皿 (図版16a 写真図版13a)

D I - f 4 の第Ⅱ層より単独出土した。扁平な自然石を用い、人間の顔面を思わせる形状を

呈している。石質は輝石安山岩で、計測値は長軸最大幅27.5cm、短軸最大幅21.9cm、最大厚5.5cmである。両面の中央部は僅かに凹状を呈し、両面を使用したものと考えられる。

筥状石器 (図版16b 写真図版13b)

D I—f 5の第Ⅱ層より単独出土した。石質は硬質泥岩で、両面加工されている。全体に雑な作りであるが、刃部のみは入念に剝離している。計測値は長軸最大幅7.3cm、短軸最大幅4.1cm、最大厚1.4cmである。

磨石 (図版16c 写真図版13c)

E I—c 4の第Ⅱ層より単独出土した。石質は砂質凝灰岩である。計測値は長軸最大幅14.7cm、短軸最大幅 5.7cm、最大厚 4.1cmである。機能面は幅 2.2cmのもの と 1.2cmのものとの2面あり、機能面以外の側面も整形を目的とした研磨がなされている。先端部に敲打のためと考えられる打痕を伴っている。

磨石 (図版16d 写真図版13d)

E I—d 1の第Ⅱ層より単独出土した。石質は淡緑色砂質凝灰岩で、計測値は長軸最大幅16.2cm、短軸最大幅 7.7cm、最大厚 4.7cmである。機能面の幅は 1.6cmで、全体に僅かに湾曲している。先端部に大きく打痕が認められるが、これは敲打によるためと考えられる。

磨石 (図版16e 写真図版13e)

E I—d 2の第Ⅲ層上面から出土した。石質は石質凝灰岩で、計測値は長軸最大幅 8.4cm、短軸最大幅 3.9cm、最大厚 2.2cmである。中央部が機能面に対してほぼ垂直に欠損している。機能面の幅は 2.2cmで、ほぼ水平である。先端部に敲打によると考えられる打痕がある。

サイドスクレーパー (図版16f 写真図版13f)

D I—d 6の第Ⅱ層より単独出土した。石質は硅質頁岩で、拇指状の形状を呈している。計測値は長軸最大幅 9.3cm、短軸最大幅 4.7cm、最大厚 1.9cmである。片面加工で、刃部が凹状と直状に連続して形成されているが、剝離は粗い。

Ⅶ. ま と め

下平遺跡の発掘調査で検出した遺構と遺物についての概要は、以上に述べてきたとおりであるが、ここでは若干の考察を加えてまとめとしたい。

住居址

本遺跡において検出された住居址は、縄文晩期竪穴住居址1棟、中世竪穴住居址1棟、時期不明の掘立柱建物跡1棟である。

E I—1 竪穴住居址の炉の埋設土器および床面から出土した浅鉢形土器は、縄文晩期大洞C₁式のものであるが、調査区域内において、この住居址と同一時期と考えられる遺構は全く検出されず、僅かにE II 区において縄文晩期土器片が出土したのみである。したがって、本遺跡内において他の遺構、遺物との関連から集落構成を明らかにすることはできなかった。しかし、北壁際の礫群が壁の崩落を防ぐためのものとする、同様の施設の検出された桜沼遺跡(註1)との関連も考えねばならず、いずれ周辺の遺跡の調査を待って本住居址の性格を明らかにしていきたい。

D I—1 竪穴住居址には伴出する遺物が無く、構築時期を即断することはできないが、盛岡市つなぎⅢ遺跡(註2)、北上市丸子館遺跡(註3)、二戸市沢内B遺跡(註4)等から検出された「出入口」状の張り出しをもち、各コーナーに柱穴を配置する竪穴住居址に類似している。これらの遺跡調査者は、時期を中世～近世としており、当住居址も形態が近似していることからほぼ同一時期のものと考えられる。

D I—2 掘立柱建物跡は、D I—1 竪穴住居址の南側に隣接している。伴出する遺物が無く構築時期は明確でない。P₉の柱穴はD I—1 竪穴住居址の出入口と考えられる張り出しを覆ぐ位置にあることから、D I—1 竪穴住居址と関連するものとは考えられず、D I—1 竪穴住居址との前後関係は不明である。

陥し穴状遺構

下平遺跡の発掘調査により検出された陥し穴状遺構は、34基をかぞえる。その分布する範囲は、調査区域西側の洪積段丘上に限られ、黒沢川にゆるく傾斜していく崖線下の沖積面からは検出されていない。

本遺跡で検出された陥し穴状遺構は、横浜市霧ヶ丘遺跡で分類されたE型(註5)、札幌市S411、268遺跡で分類されたA1型(註6)等に概当する幅の狭い溝状を呈するピットである。

陥し穴状遺構は第Ⅲ層黄褐色土層上面において、黒褐色土層あるいはクロボク層の落ち込みによって確認された。規模は確認面における平均値で長軸329cm、短軸42cm、深さ85cmである。

長軸方向の縦断面をみると、両端部もしくは片端部が奥に挟り込まれているものと、ほぼ垂直におりにているものがある。また、短軸方向の横断面をみると、壁が開口部から傾斜して下り、中層部からほぼ垂直におりるもの、開口部から底部までゆるやかに傾斜しておりるもの、および開口部から底部までほぼ垂直におりるものがある。このように横断面が漏斗状ないしくはくさび形状を呈するのは、埋土等から廃棄後における開口部の崩壊や壁面の剝落によるものと考えられるものが多く、本来的には、壁は開口部より底部までほぼ垂直におりにいたものと考えられる。底面はほとんどのものが平坦であるが、丸底状を呈するものもある。底部施設の小ピットを伴うものはない。

陥し穴状遺構の壁面を形成する層位は、上層部が明褐色土層、中層部が黒褐色土層、下層部が黄褐色土層で構成されている。埋土はいずれも自然堆積の状態を示し、開口部をクロボク層、黒褐色土層が占め、中層部は黒褐色～褐色土層、下層部は褐色土層、黒褐色土層、クロボク層によって構成されているのが一般的である。中層部から下層部にかけて褐色シルト質土が小ブロック状に混入することが多く、これは開口部または壁の剝落による混入と考えられる。底面を覆う最下層にクロボク層、黒褐色土層がみられるのは、表土の流入、中層部壁面の剝落、落葉や枯草等の腐植土などと考えられる。

さて、この幅の狭い溝状のピットを陥し穴としてとらえることについては、現在は一般的なものとなりつつあるようであるが、ここでも幅の狭いことにより陥ち込んだ鹿などの動物を身うごきできなくしてしまうであろうこと、壁が垂直であることにより動物のからだを挟み込み、しかも、這い出ようとしても足がかりとするものがないこと、両端下部の挟り込みも、鹿などのものが動物の足がかりを失なわせるためのものではなかろうかと考えられることなど、形状、機能から陥し穴としてとらえたい。

D I — 1 陥し穴状遺構から D I — 18 陥し穴状遺構に至る 18 基の陥し穴状遺構群は、長軸をほぼ磁北方向に向け、東西方向にほぼ等間隔に並列している。段丘の崖線に対しては、長軸がほぼ平行する方向を示している。陥し穴状遺構が台地上や丘陵先端部に多く検出されることは周知のことであるが、その配列にも規則性をもつことが多くの報告例によって指摘されている。長軸方向を一致させ、かつ等間隔に並列する例としては荒屋Ⅱ遺跡(註7)の7基をあげることができるが、本遺跡のごとく18基もの陥し穴状遺構が並列する例は未だ報告されていない。しかも、D I — 1 陥し穴状遺構は調査区域の境界ぎりぎりに検出されており、調査区域外にも並列する可能性もある。これらの陥し穴状遺構は同時に構築されたものか否かの問題があるが、ほとんどが同一規模(18基の平均値は長軸310cm±、短軸40cm±、深さ80cm±で、あまりばらつきはない。)で、形状、埋土の堆積状態からしても同一の構築技法により、同時に構築されたものと考え得る。長軸方向および位置によって、D I — 1 陥し穴状遺構～D I — 10 陥し穴状遺構の10基と、D I — 11 陥し穴状遺構～D I — 17 陥し穴状遺構の7基の2群に分けて考えることも可能であるが、この2群が同時に構築されたものか、あるいは時間差をもつものかは、規模、形状、埋土等からは判別することができないし、もし、時間差をもって構築されたものとしても、かけ離れた時間があるとは考えられない。

さて、このように陥し穴状遺構を18基も等間隔に並列的に並べて構築する理由は何であろうか。この溝状のピットを動物を捕えるための陥し穴と考えるとき、この並列的な配置は捕獲の確率をより高めるためのものとするのが妥当と考えられる。段丘の崖線に平行に構築され、平均間隔132cmと接近し過ぎるために互の陥し穴状遺構が崩壊することのないように配慮しつつ、

走り来る動物が容易に通り返けることの難しい間隔に18基もの溝状のピットを配置していることから、これらは崖線に沿ったいわゆる「けものみち」に仕掛けた陥し穴ないしは、勢子の追いついた獲物を陥す穴と考えたい。

C I—1 陥し穴状遺構、C I—2 陥し穴状遺構、C I—3 陥し穴状遺構の3基は、調査区域の境界線にかかり、北東側の過半部の詳細は不明であるが、明らかに長軸方向を同一とし、ほぼ等間隔に配置され、これら3基とC I—12 陥し穴状遺構、C I—13 陥し穴状遺構の2基も間隔は少しあくが平行関係がみられる。これら5基は、D I—1 陥し穴状遺構～D I—18 陥し穴状遺構群から枝分れ状に配置され、長軸方向は、等高線および南西側の崖線と直交する方向を示している。調査区域外にもこれらと並列する陥し穴状遺構の存在の可能性を考え合わせると、崖線と長軸方向の直交する陥し穴状遺構を並列に配置することにより、崖線と平行する18基と共に段丘の崖線が北から南東方向にカーブする地域を取り囲む形の陥し穴状遺構の配置がなされていたのではないかと考えられる。

配列関係から2基をセットとして把握し得るものは、C I—9 陥し穴状遺構とC I—10 陥し穴状遺構およびC I—5 陥し穴状遺構とC I—6 陥し穴状遺構で、いずれも平行関係をもつものである。配置に規則性はみられないが、同一の長軸方向をもつものは、B I—1 陥し穴状遺構・C I—5 陥し穴状遺構・C I—6 陥し穴状遺構・C I—7 陥し穴状遺構・C I—8 陥し穴状遺構・C I—11 陥し穴状遺構で、いずれも西方向を示し、B II—1 陥し穴状遺構・C I—9 陥し穴状遺構・C I—10 陥し穴状遺構はほぼ磁北方向を示している。C I—4 陥し穴状遺構は境界線上の5基同様に北東方向を示すため、D I—19 陥し穴状遺構のみが単独に北西方向を示している。このように並列的な配置性をもたないものでも、長軸方向の一致するものは、それぞれに方向的意図をもって配置されたものと考えられる。

本遺跡における陥し穴状遺構の構築年代については、遺物の出土が全く無く、他の遺構との切り合い、重複もみられないことから推定することは困難である。本遺跡および周辺から出土する土器は、縄文早期末葉より晚期中葉に及ぶ多時期のものである。年代決定の有力な資料を伴出しないのも陥し穴状遺構の特徴の一つをなすものであるが、ちなみに、岩手県内において陥し穴状遺構の年代決定のできる遺跡は、底面上より前門前式土器（縄文後期初頭）を出土している湯沢遺跡（註8）のもののみである。

いずれにしろ、本遺跡は縄文期のいずれかの時期に、これら陥し穴状遺構群によって、狩り場としての機能が形成されていたものと把握したい。

土器

本遺跡より出土した土器は、深鉢形土器1、浅鉢形土器1、尖底土器1および土器片少量である。深鉢形土器と浅鉢形土器はE I—1 竪穴住居址より出土したもので、いずれも縄文時代

晩期大洞C₁式のものである。深鉢形土器は炉に直立に埋設された粗製土器であるが、焼成は受けていない。浅鉢形土器は台部が欠損し、口唇および器表面の磨耗がはげしく、半精製土器とも言いたい様相を呈するものである。尖底土器は黒沢川の旧河道である沖積面からの唯一の出土遺物である。砲弾形を呈す器形と器表面に施された複節斜行縄文および僅かに繊維を含む胎土、粗い内面調整等から、青森県三沢市早稲田貝塚(註9)で分類された第4類～第6類に相当するものと考えられる。調査区域に隣接する大崎電気工場の近辺より、かつて縄文早期末葉のものと考えられる土器片が採取されており(註10)、本尖底土器との関連が考えられる。

縄文土器片の出土は少ないが、中期初頭(大木7a式)、中期末葉(大木9式～大木10式)、晩期中葉(大洞C₁式)と多時期に亘っている。本遺跡内で検出された遺構のうち、これら土器片と関連をもつと考えられるのはE I - 1 竪穴住居址(晩期大洞C₁式土器を出土)のみであるが、調査区域周辺からも同時期の土器片が採集され、縄文期の多時期に亘る遺構が調査区域周辺に存在することが考えられる。

石器

本遺跡からは、石皿1、磨石3、筥状石器1、が出土している。いずれも遺構外の第Ⅱ層からの出土である。磨石は棒状で側面に磨面をもち、先端部には打痕がある。この形態をもつ磨石は二戸市長瀬B遺跡(註11)および二戸市沢内B遺跡(註12)など縄文早期中葉～末葉の遺跡から出土し、長野県赤坂遺跡など中部地方で「特殊磨石」(註13)として分類されたものの中にこの形態をもつものが含まれている。この形態をもつ磨り石は、磨りと敲きの二つの機能をもつ石器と考えられる。石皿および筥状石器については出土層、形状等からは時期を明確にできなかった。

VIII. お わ り に

下平遺跡の発掘調査で得られた成果については前章までに述べ、問題点も指摘してきたが、一応その概要をまとめてみたい。

縄文時代の遺構は、竪穴住居址1棟、陥し穴状遺構33基が検出されている。特に18基もの陥し穴状遺構が長軸方向を同一にして、ほぼ等間隔に並列して検出されたのは他に類例をみないものであり、陥し穴としての機能と狩り場の性格を考える上で重要な手懸りとなるものと考えられる。ただ遺物の伴出がなく、他の遺跡の例と同様、ここでも明確な時期の決定をすることができなかった。

縄文時代の遺物は、土器、石器とも出土数こそ少ないが、多時期に亘る遺物が出土している。

特に尖底土器および磨石の出土は、調査区域周辺より採集される繊維土器片と共に調査区域周辺に縄文早期末葉の遺構の存在をうかがわせている。

歴史時代の遺構としては、中世～近世のものと考えられる竪穴住居址1棟と、掘立柱建物跡1棟がある。いずれも伴出遺物もなく、時期は必ずしも明確ではないが、各地で検出される中世～近世の住居址との比較研究により、さらに性格を明らかにしていきたい。

今回の発掘調査にあたっては、雫石町教育委員会、雫石町企画開発室、建設省岩手工事々務所、大崎電気岩手工場の諸機関と、向井善太郎、築田政高両氏をはじめとする地元協力員の方々のご協力を賜わり無事に終えることができたことを感謝致します。

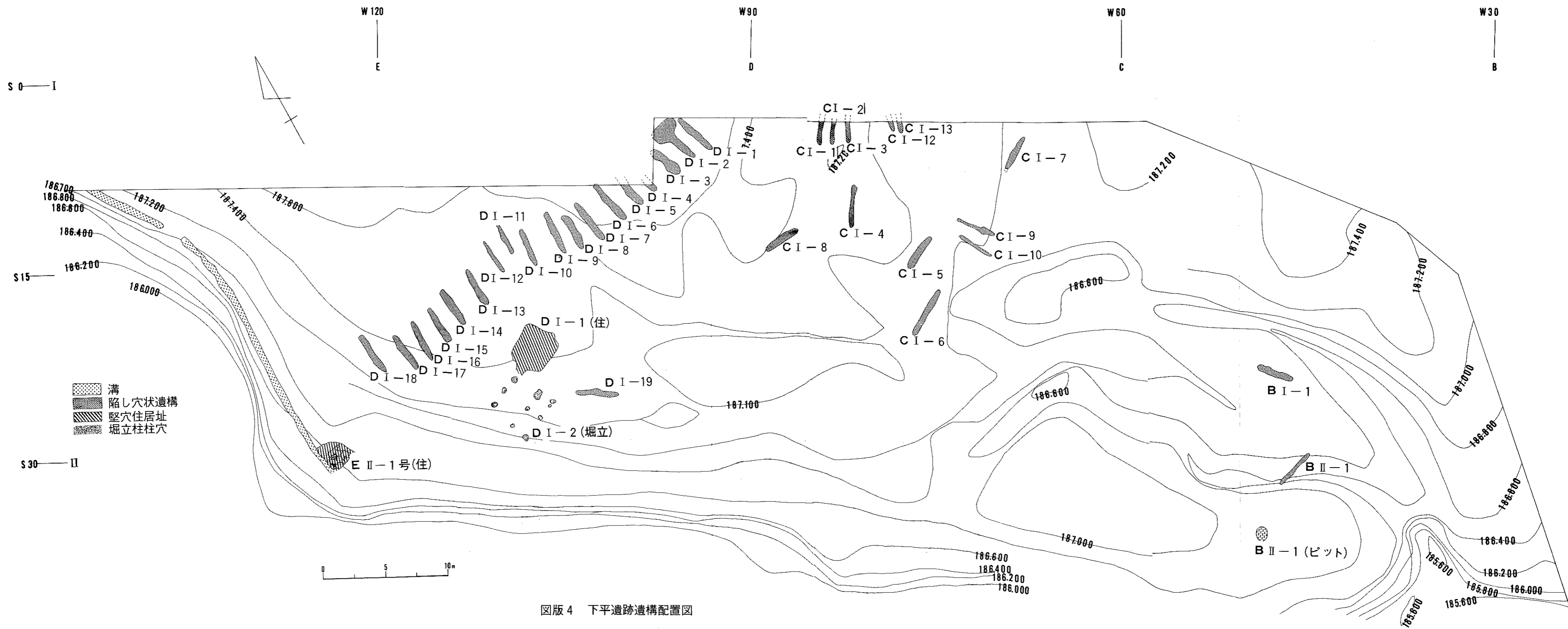
報告書作成にあたっては、石質の分析は岩手県立博物館建設事務所の佐藤二郎氏にご指導をいただき、また、岩手県埋蔵文化財センター調査員各氏からは種々の資料の提供と助言をいただき、センター内協力員からも絶大なご協力を得たことを心から感謝致します。

(文責 金沢光孝)

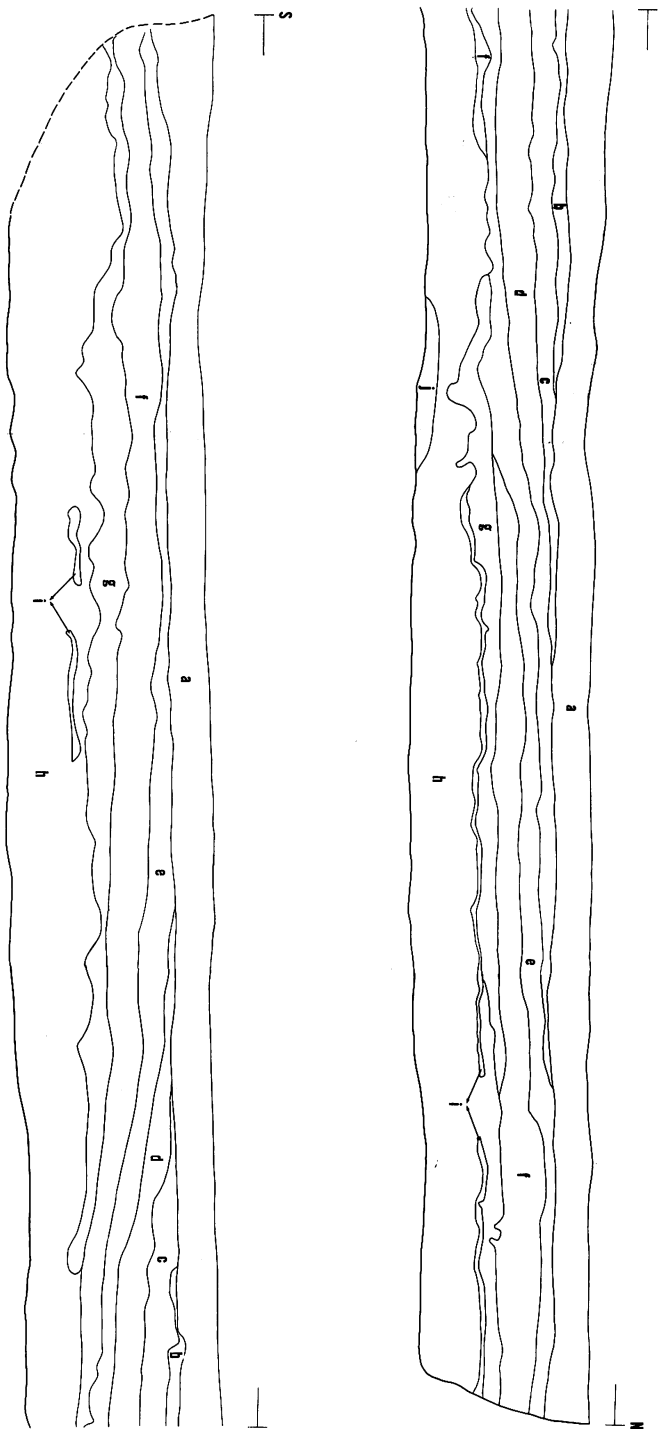
-
- 註1 雫石町教育委員会 「桜沼遺跡調査概報」 1975
 - 註2 調査報告書未刊、調査者の教示による。
 - 註3 北上市教育委員会 「北上市丸子館調査報告書」 文化財調査報告第12集 昭和48年3月
 - 註4 調査報告書は昭和53年度末に刊行の予定（岩手県埋蔵文化財センター）
 - 註5 霧ヶ丘遺跡調査団 「霧ヶ丘」 1973
 - 註6 札幌市教育委員会 「札幌市文化財調査報告書Ⅷ」 1978
 - 註7 調査報告書未刊、筆者も調査に参加
 - 註8 岩手県埋蔵文化財センター 「都南村湯沢遺跡」（昭和52年度）岩手県埋蔵文化財調査報告第2集
 - 註9 角塚扇三、三本柳正一、佐藤達雄、渡辺兼庸 「早稲田貝塚」上北考古学会報告1
 - 註10 高橋与右衛門氏の教示による。
 - 註11 調査報告書未刊、調査者の教示による。
 - 註12 註4に同じ。
 - 註13 八木光則 「いわゆる『特殊磨石』について」 雑誌「信濃」第28巻第4号 昭和51年4月号

参 考 文 献

- 札幌市教育委員会 「札幌市文化財調査報告書」 X IV 1977
- 札幌市教育委員会 「札幌市文化財調査報告書」 X V 1977
- 青森県教育委員会 「源常平遺跡」 青森県埋蔵文化財報告書第39集 昭和52年度
- 松前町教育委員会 「鬼沢B遺跡、棚石遺跡調査報告」 1978.3
- 松前町教育委員会 「松前町大津遺跡発掘報告書」 1974
- 岩手県教育委員会 「東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査略報」 昭和52年3月
- 岩手県教育委員会 「埋蔵文化財発掘調査報告 西田遺跡」 昭和52年度
- 雫石町教育委員会 「雫石町史」 昭和54年
- 今村啓爾 「縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較」 物質文化 1976.10
- 寺社下 博 「千葉、上ノ台遺跡第Ⅱ次調査概報」 先史 9 1975.4
- 渡辺俊一 「厚真1遺跡のTピットについて」 郷土の研究第4号 1978
- 名久井文明 「北日本における石器時代の溝状ピットについて」 年報社会科研究18号

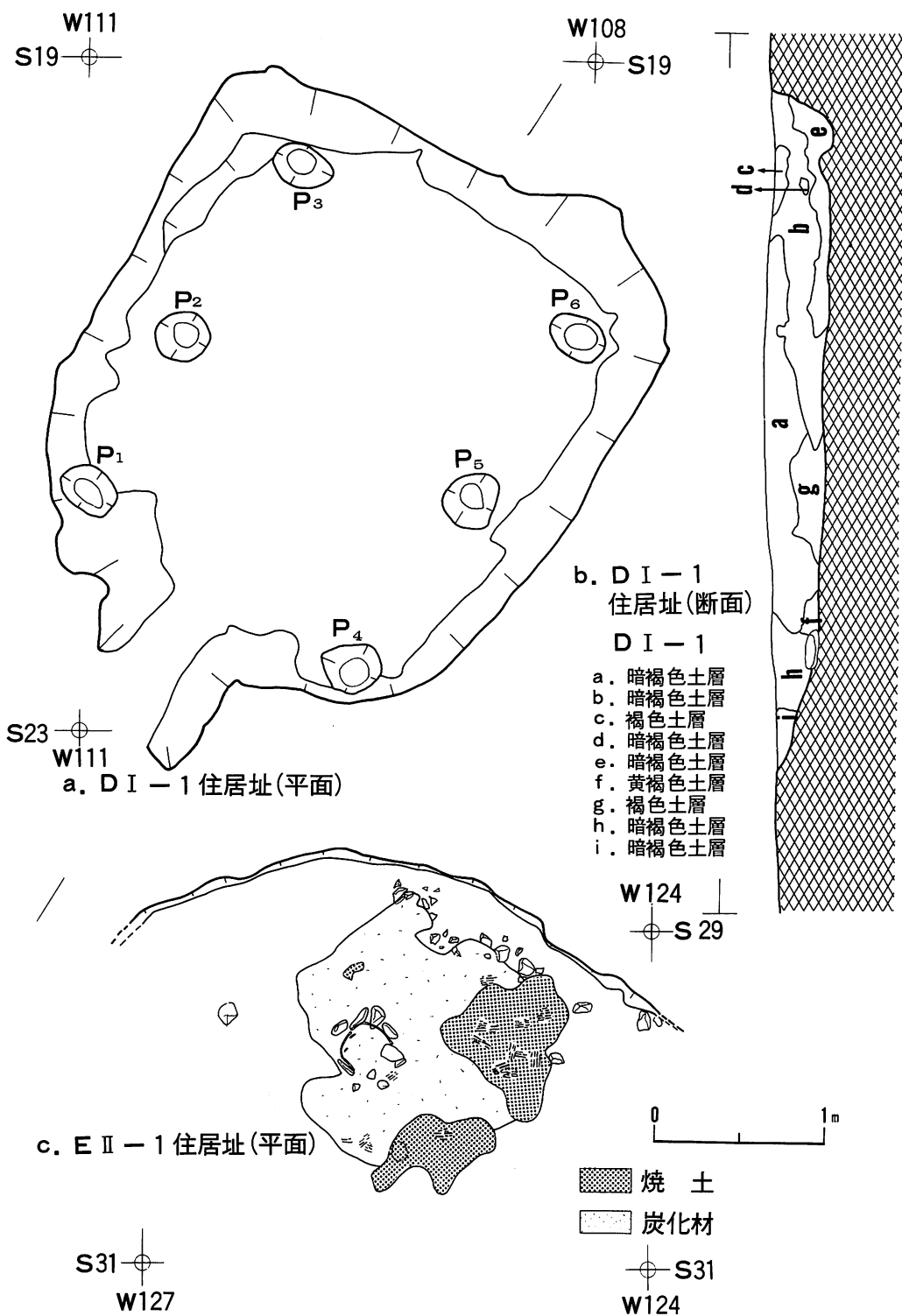


図版4 下平遺跡遺構配置図



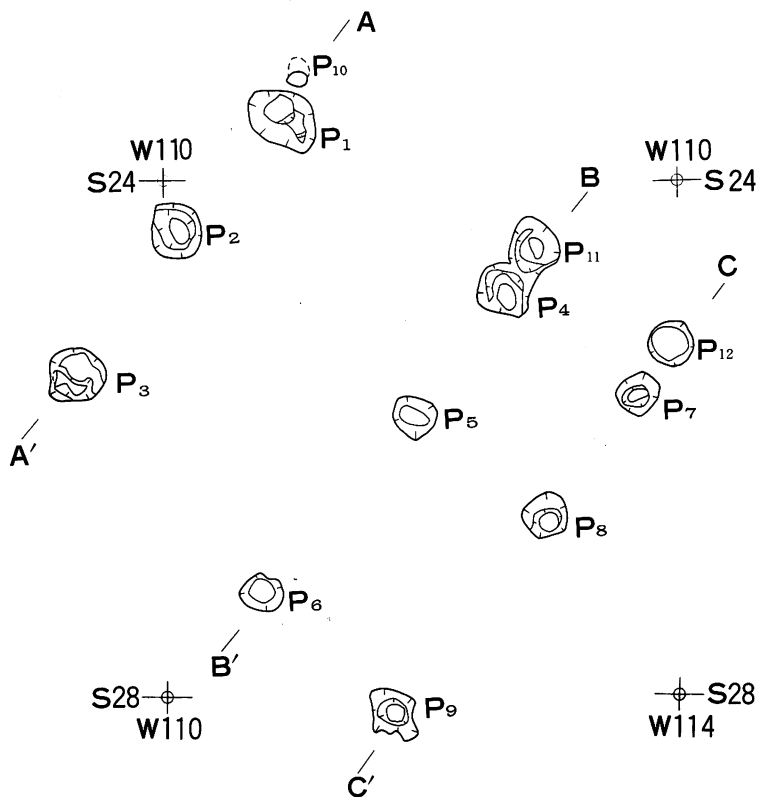
- a. 灰口赤土層 (含炭化物微粒)
- b. 暗褐色土層
- c. 黑褐色土層
- d. 明褐色土層
- e. 黑褐色土層
- f. 黑褐色土層
- g. 黑褐色土層
- h. 黃褐色土層
- i. 細砂層
- j. 砂層

図版 5 土層断面図

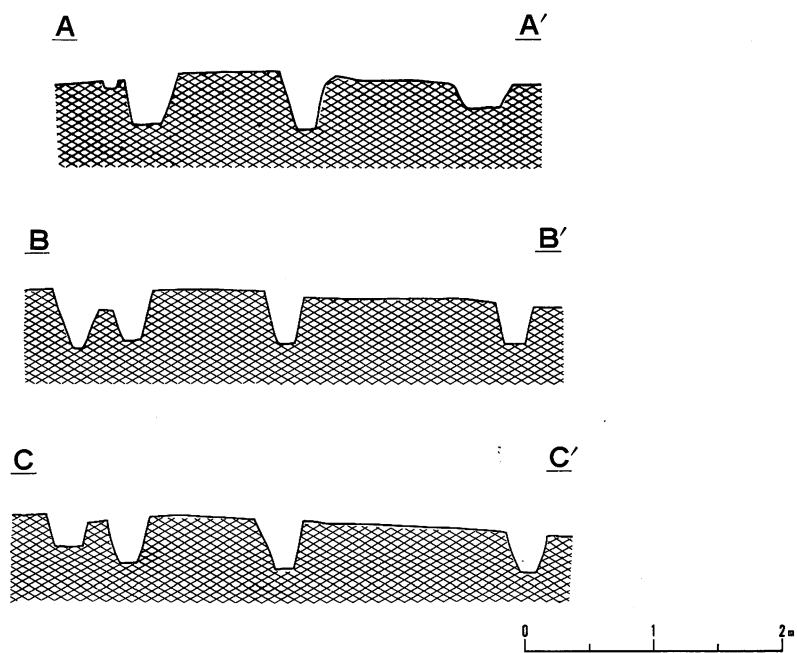


图版 6
竖穴住居址平面、断面图

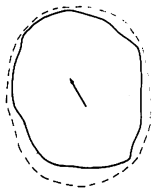
D I - 2 掘立柱建物跡(平面)



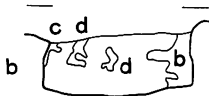
D I - 2 掘立柱建物跡(断面)



掘立柱建物跡、平面、断面图
图版 7



B II - 1



B II - 1

B II - 1

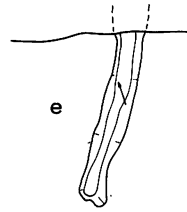
- a. クロボク層
- b. 褐色土層(含、焼土)
- c. クロボク層(含、焼土)
- d. 褐色土層



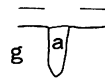
B I - 1



B II - 1

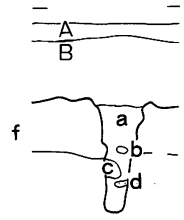


C I - 1



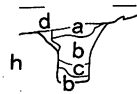
B II - 1

- a. 黒褐色土層



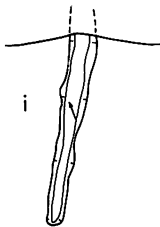
C I - 1

- A. クロボク層
- B. クロボク層
- C. 茶褐色土層
- a. 黒褐色土層
- b. 暗褐色土層
- c. 茶褐色土層
- d. 暗褐色土層

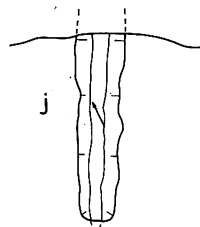


B I - 1

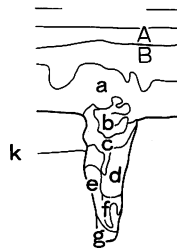
- a. 暗褐色土層
- b. 黒褐色土層
- c. 暗褐色土層
- d. 黒褐色土層



i



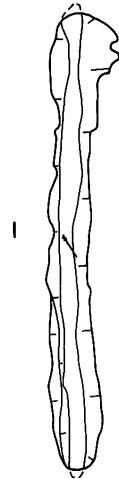
j



k

C I - 3

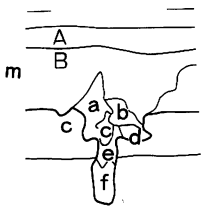
- A. クロボク層
- B. クロボク層
- C. 茶褐色土層
- a. クロボク層
- b. 黒褐色土層
- c. 黒褐色土層
- d. 黒褐色土層
- e. 黒褐色土層
- f. 黒褐色土層



l

C I - 4

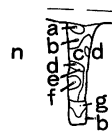
- a. 暗褐色土層
- b. 褐色土層
- c. 褐色土層
- d. 黄褐色土層
- e. クロボク層
- f. 暗褐色土層
- g. 褐色土層
- h. クロボク層(含、焼土)



m

C I - 2

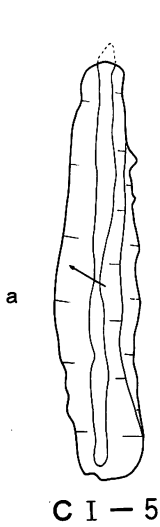
- A. クロボク層
- B. クロボク層
- C. 茶褐色土層
- a. クロボク層
- b. 黒褐色土層
- c. 黒褐色土層
- d. 黒褐色土層
- e. 黒褐色土層



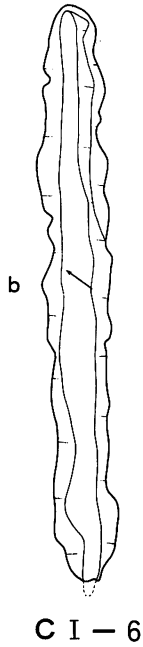
n

a, b ビーカー形ピット平面断面図
c~m 陥し穴状遺構平面断面図

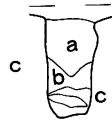
図版 8 縮尺 1/60



CI-5



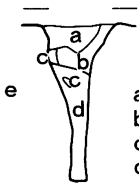
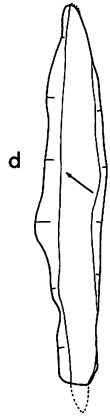
CI-6



CI-6

CI-6

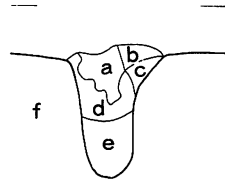
- a. 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b. 黄褐色土層
- c. 黒褐色土層
- d. 黒褐色土層



CI-5

- a. クロボク層(含、焼土、炭化物)
- b. 黒褐色土層
- c. 褐色土層
- d. 褐色土層

CI-5



CI-7

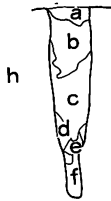
CI-7

- a. 暗褐色土層
- b. クロボク層
- c. 褐色土層
- d. 黄褐色土層
- e. 褐色土層



CI-8

- a. 黄褐色土層(含、焼土)
- b. クロボク層
- c. 褐色土層
- d. 暗褐色土層
- e. 黒褐色土層
- f. 黒褐色土層



CI-9



CI-9

CI-9

- a. 褐色土層



CI-10

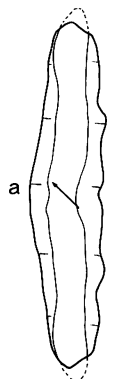


CI-10

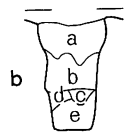
縮尺 1/60

陥し穴状遺構平面断面図

図版 9

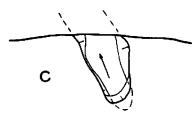


CI-11

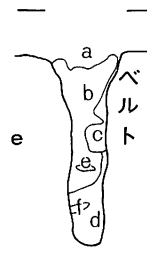


CI-11

- CI-11
- a. クロボク層(含、焼土)
 - b. 黒褐色土層
 - c. 褐色土層
 - d. 黄褐色土層
 - e. 黄褐色土層

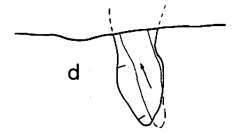


CI-12

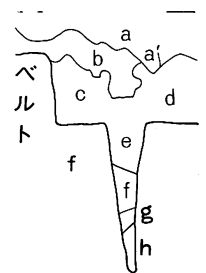


CI-12

- CI-12
- a. 茶褐色土層
 - b. 黒褐色土層
 - c. 黄褐色土層
 - d. 黄褐色土層
 - e. 黄褐色土層
 - f. 黄褐色土層

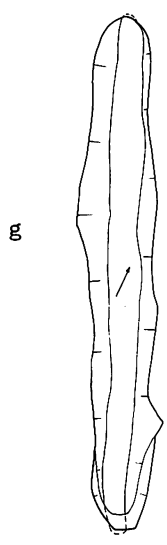


CI-13

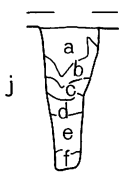


CI-13

- CI-13
- a. 黒褐色土層
 - b. 黒褐色土層
 - c. 褐色土層
 - d. 褐色土層
 - e. クロボク層
 - f. 褐色土層
 - g. 褐色土層
 - h. 褐色土層

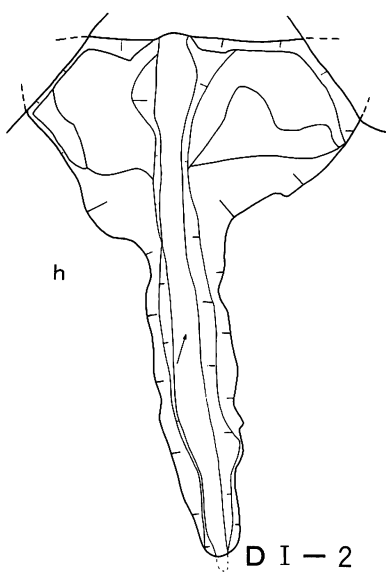


DI-1

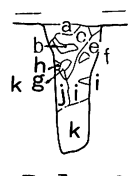


DI-1

- DI-1
- a. 黒褐色土層
 - b. 褐色土層
 - c. 黒褐色土層
 - d. 黒褐色土層
 - e. 黄褐色土層
 - f. 黄褐色土層

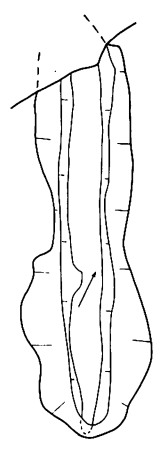


DI-2

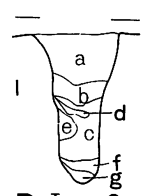


DI-2

- DI-2
- a. 暗褐色土層
 - b. 黒褐色土層
 - c. クロボク層
 - d. 暗褐色土層
 - e. 黒褐色土層
 - f. クロボク層
 - g. 黒褐色土層
 - h. クロボク層
 - i. 暗褐色土層
 - j. 暗褐色土層
 - k. 暗褐色土層



DI-3

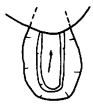


DI-3

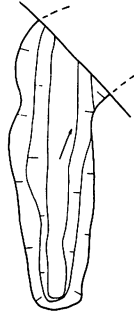
- DI-3
- a. クロボク層
 - b. 褐色土層
 - c. クロボク層
 - d. 褐色土層
 - e. クロボク層
 - f. 褐色土層
 - g. クロボク層

陥し穴状遺構平面断面図 図版10

縮尺 1/60



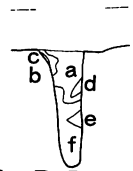
a. DI-4



c. DI-5

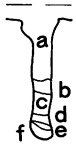


e. DI-6



f. DI-6
DI-6

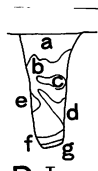
- a. クロボク層
- b. 黒褐色土層
- c. 褐色土層
- d. 暗褐色土層
- e. 暗褐色土層
- f. 暗褐色土層



b. DI-4

DI-4

- a. 黒褐色土層
- b. 褐色土層
- c. 黄褐色土層
- d. 黄褐色土層
- e. 褐色土層
- f. 褐色土層



d. DI-5

DI-5

- a. クロボク層
- b. 黒褐色土層
- c. 暗褐色土層
- d. 褐色土層
- e. 褐色土層
- f. 褐色土層
- g. 暗褐色土層



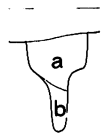
g. DI-7



i. DI-8



k. DI-9



j. DI-8

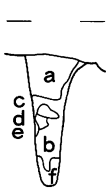
DI-8

- a. 黒褐色土層
- b. 暗褐色土層



l. DI-9
DI-9

- a. クロボク層
- b. 黒褐色土層
- c. 褐色土層
- d. 黄褐色土層
- e. 褐色土層
- f. 黒褐色土層
- g. 暗褐色土層



h. DI-7

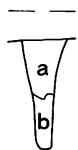
DI-7

- a. クロボク層
- b. 暗褐色土層
- c. 暗褐色土層
- d. クロボク層
- e. 褐色土層
- f. 褐色土層

陥し穴状遺構平面断面図



a . DI - 10



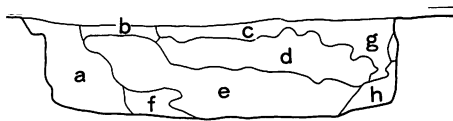
b . DI - 10

DI - 10

- a . 黒褐色土層
- b . 褐色土層



c . DI - 11



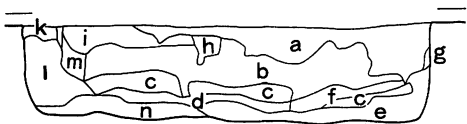
d . DI - 11

DI - 11

- a . 黒褐色土層
- b . クロボク層
- c . クロボク層
- d . 黒褐色土層
- e . 暗褐色土層
- f . 暗褐色土層
- g . 黒褐色土層
- h . 黒褐色土層



e . DI - 12



f . DI - 12

DI - 12

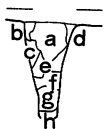
- a . 黒褐色土層
- b . 褐色土層
- c . 褐色土層
- d . 黒褐色土層
- e . クロボク層
- f . 褐色土層
- g . 黒褐色土層
- h . 暗褐色土層
- i . 暗褐色土層
- j . 暗褐色土層
- k . 暗褐色土層
- l . 褐色土層
- m . 褐色土層
- n . 暗褐色土層



g . DI - 13



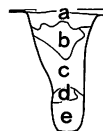
i . DI - 14



h . DI - 13

DI - 13

- a . 黒褐色土層
- b . 褐色土層
- c . 褐色土層
- d . 褐色土層
- e . 黄褐色土層
- f . 黄褐色土層
- g . クロボク層
- h . 黒褐色土層



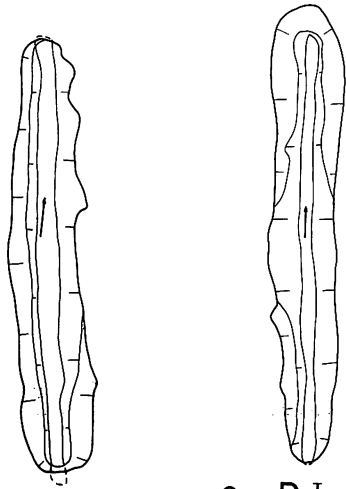
DI - 14

- a . 褐色土層
- b . 黒褐色土層
- c . 褐色土層
- d . 黄褐色土層
- e . 褐色土層

陥り穴状遺構平面断面図

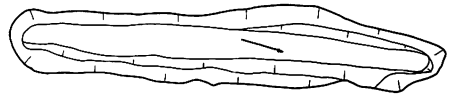
縮尺 1/60

図版12



a . DI-15

c . DI-16



e . DI-17

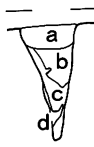


f . DI-17

DI-17



b . DI-15



d . DI-16

DI-15

- a . 褐色土層
- b . 暗褐色土層
- c . クロボク層
- d . 黄褐色土層
- e . 暗褐色土層
- f . 暗褐色土層
- g . 暗褐色土層
- h . 黄褐色土層
- i . 黄褐色土層
- j . 黄褐色土層
- k . 黄褐色土層

DI-16

- a . 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- b . 黒褐色土層
- c . 褐色土層
- d . 黄褐色土層

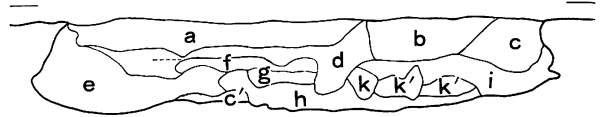
- a . 黒褐色土層(含、焼土)
- b . 褐色土層(含、焼土、炭化物)
- c . クロボク層
- d . 明褐色土層
- e . 褐色土層
- f . 明褐色土層
- g . 褐色土層
- h . 明褐色土層
- i . 赤褐色土層
- j . 暗褐色土層
- k . 明褐色土層
- l . 褐色土層
- m . 褐色土層



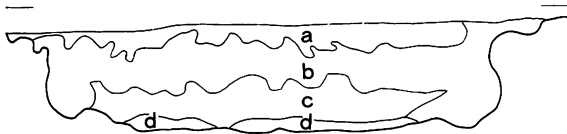
i . DI-19



g . DI-18



j . DI-19



h . DI-18

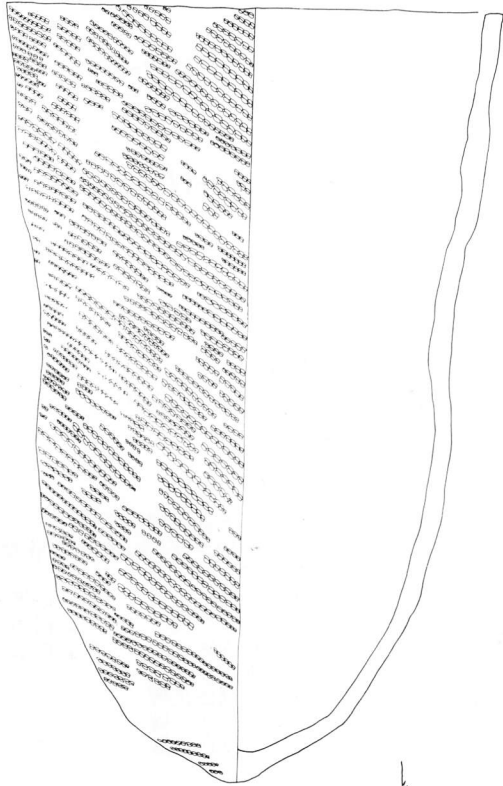
- a . 黒褐色土層(含、焼土)
- b . 褐色土層
- c . 黄褐色土層
- d . 黒褐色土層

- a . 黒褐色土層
- b . 黒褐色土層
- c . 茶褐色土層
- d . 暗褐色土層
- e . 褐色土層
- f . 暗褐色土層
- g . 褐色土層
- h . 褐色土層
- i . 褐色土層
- j . 褐色土層
- k . 褐色土層

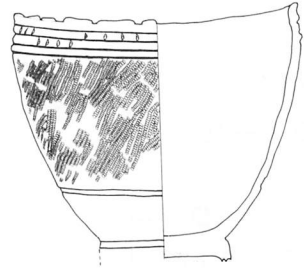
陥し穴状遺構平面断面図

縮尺 1/40

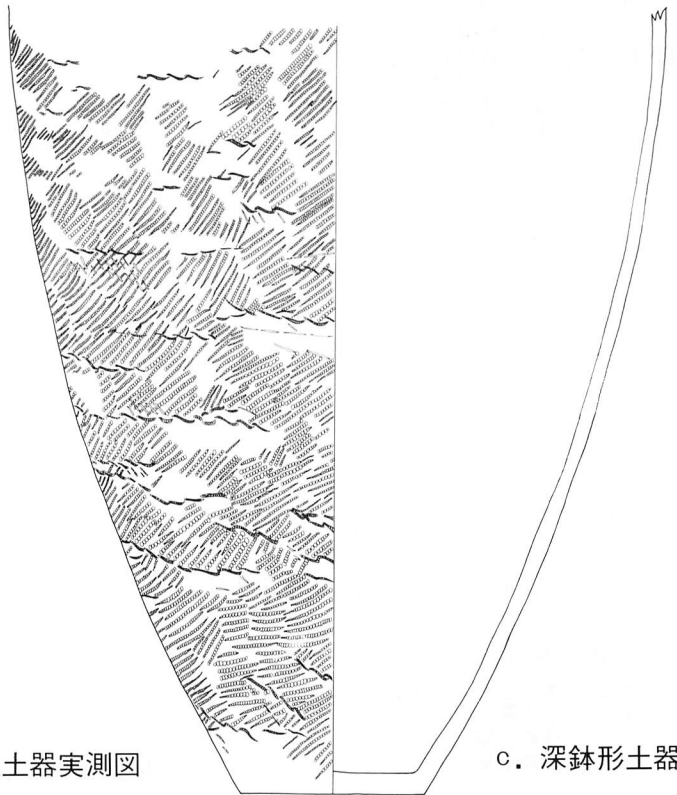
図版13



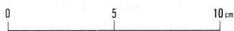
a. 尖底土器



b. 浅鉢形土器

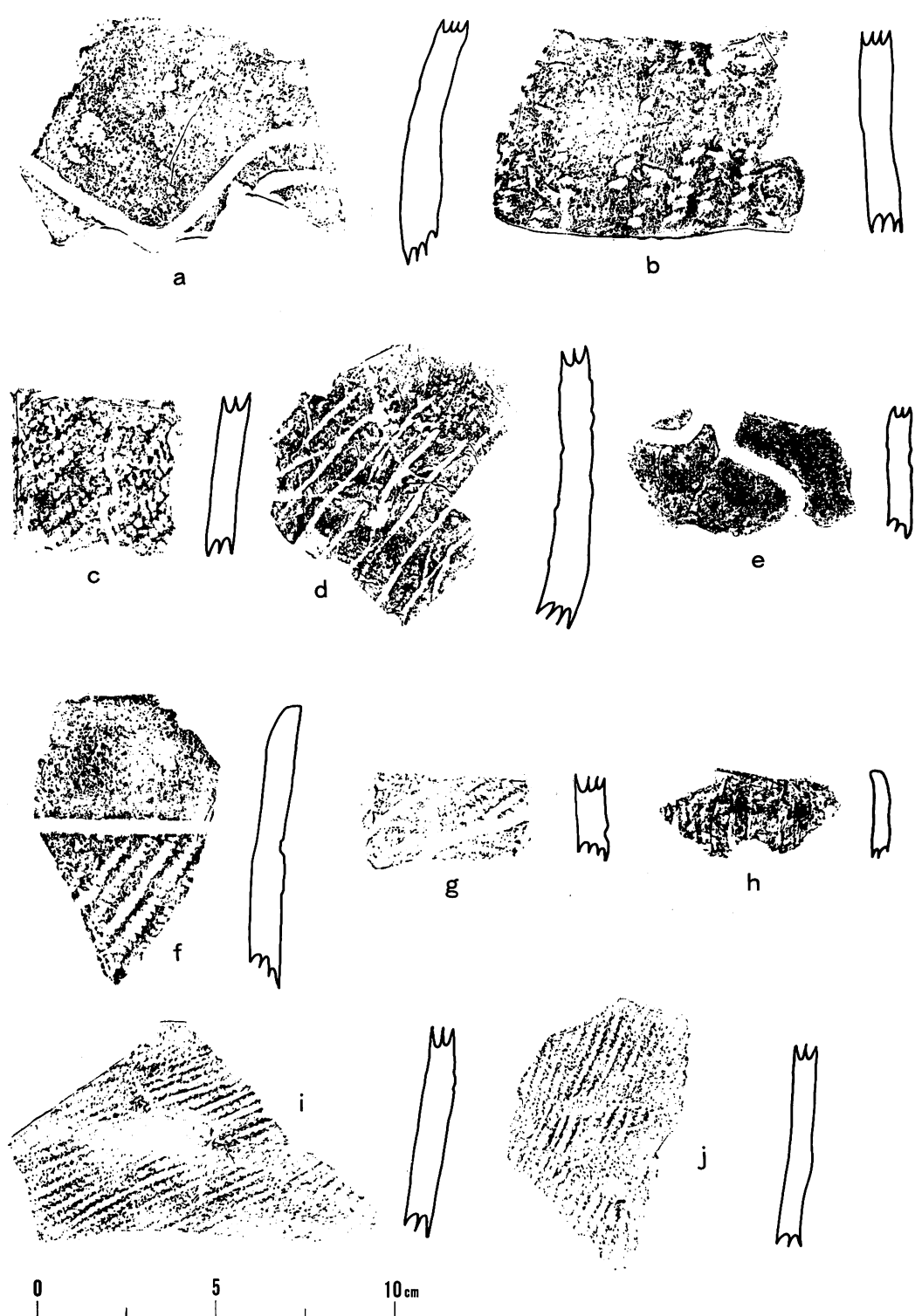


c. 深鉢形土器



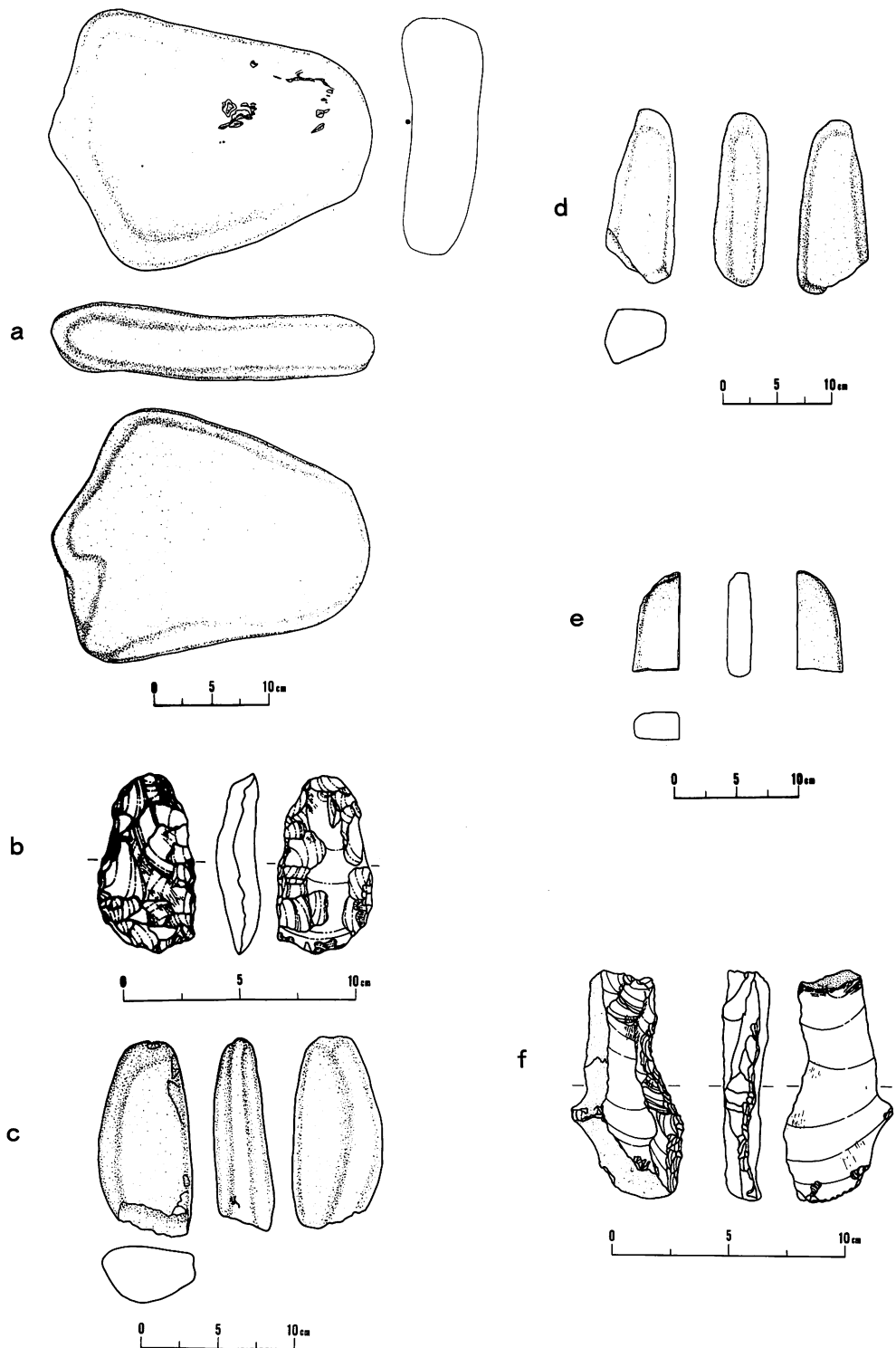
出土土器実測図

図版14



出土土器片拓影图

图版15



出土石器実測図
 図版16



下平遺跡全景

写真図版 1

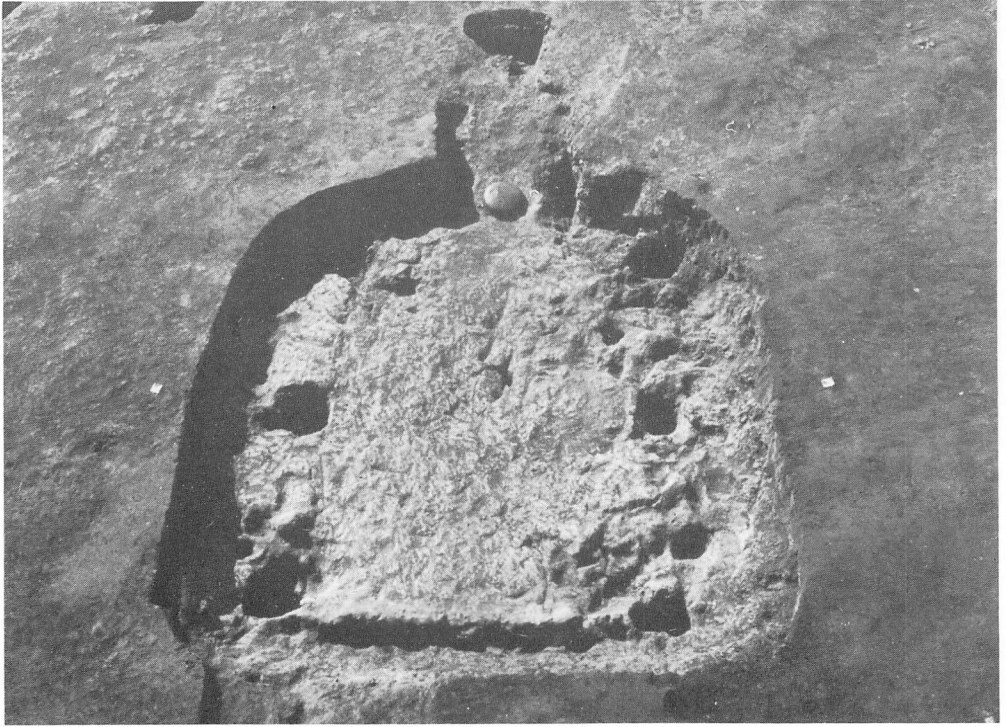


a. E II - 1 住居址

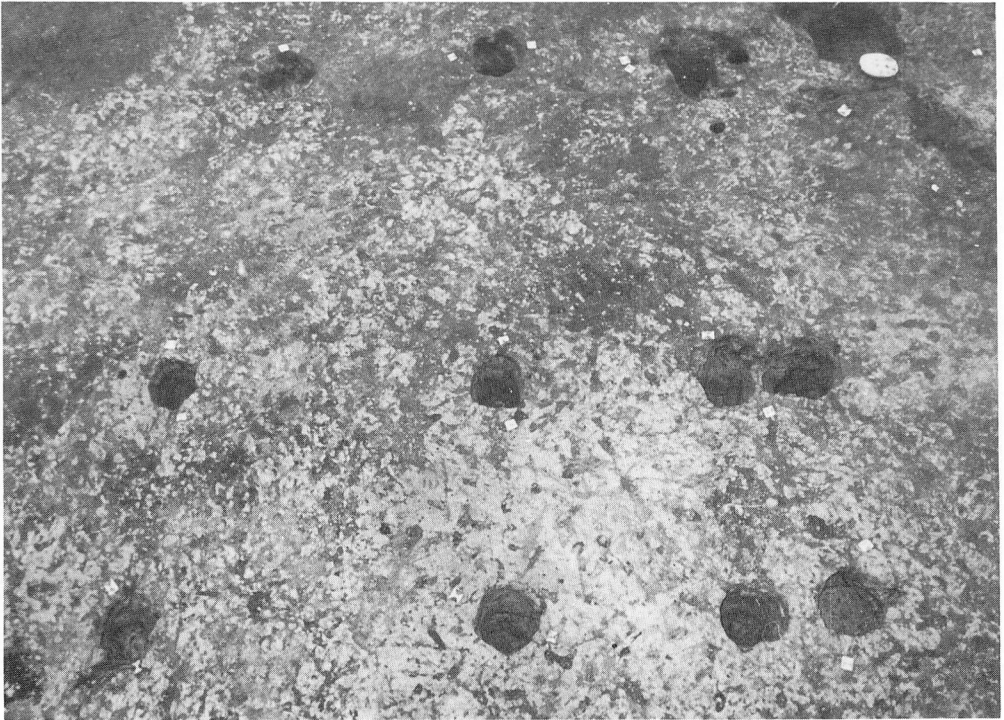


b. E II - 1 住居址石囲い炉

写真図版 2

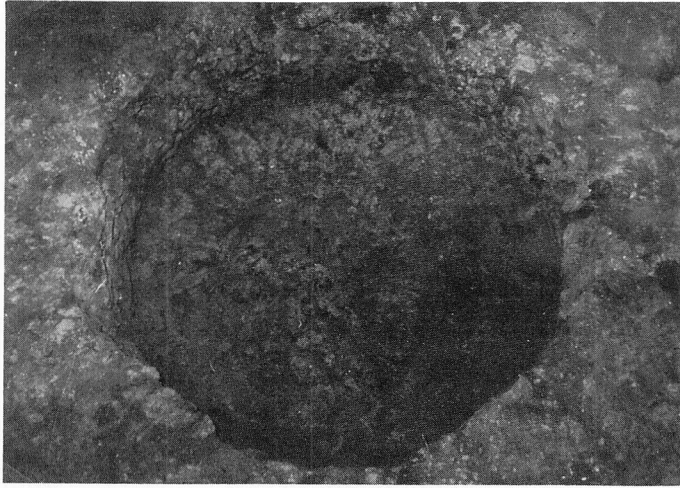


a. D I - 1 住居址

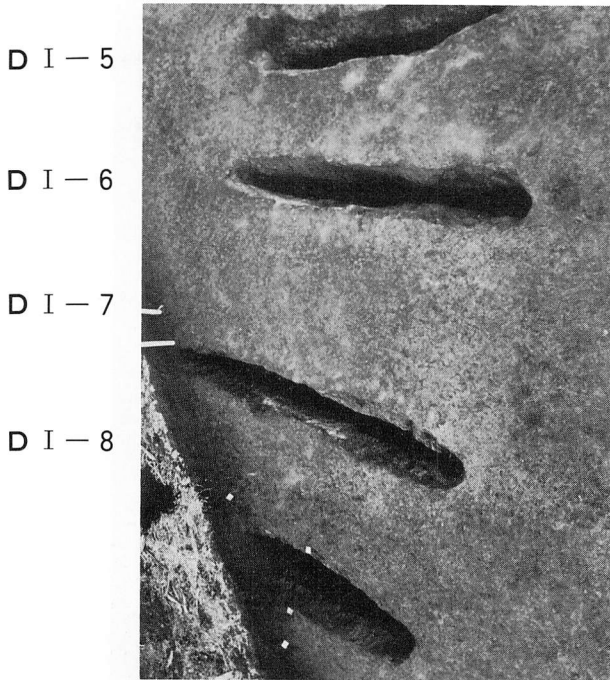


b. D I - 2 掘立柱建物跡

写真図版 3

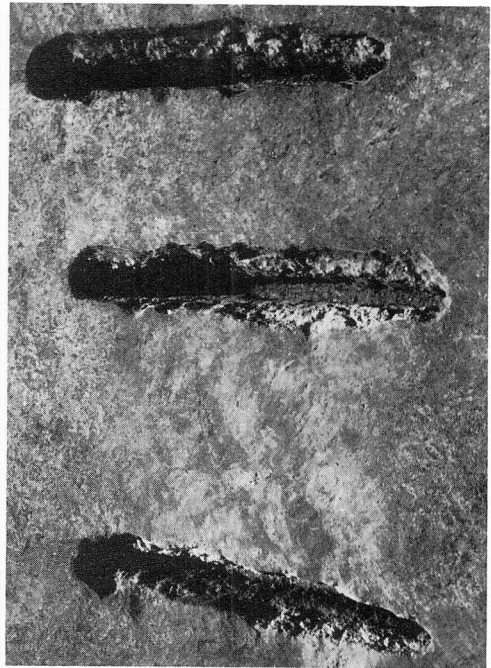


a. B II-1 ビーカー形ピット



b. 陥し穴状遺構並列状況

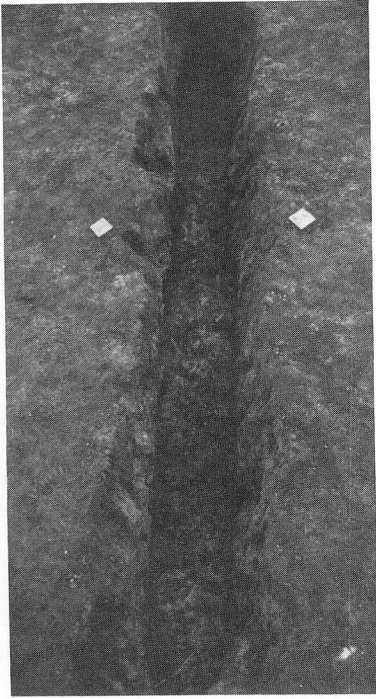
D I-5、D I-6、D I-7、D I-8



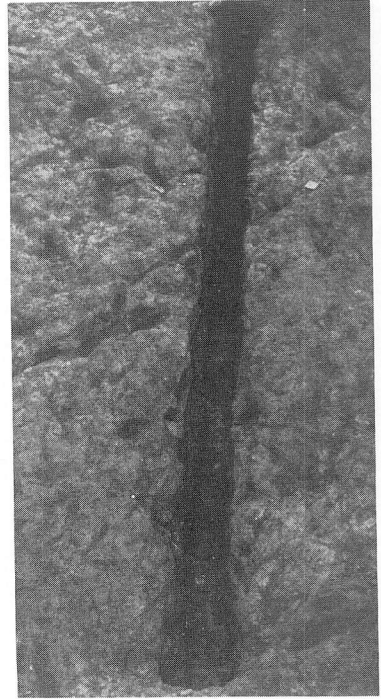
c. 陥し穴状遺構並列状況

D I-13、D I-14、D I-15

写真図版 4



a. B I - 5



b. B II - 1

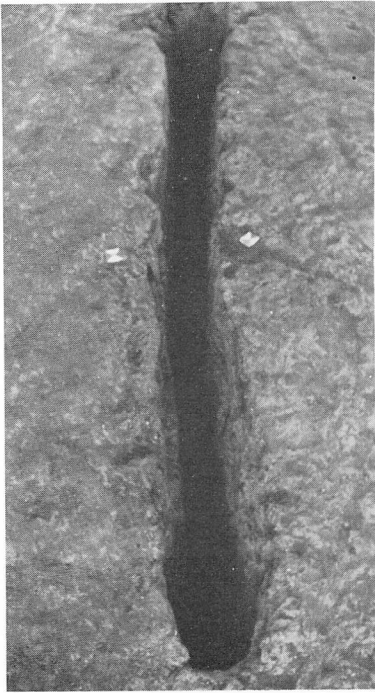


c. C I - 1

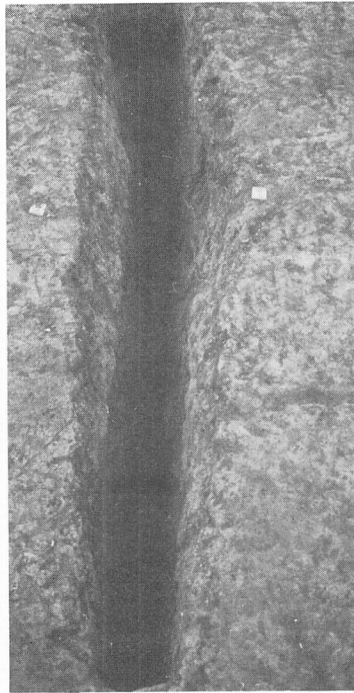
d. C I - 2

e. C I - 3

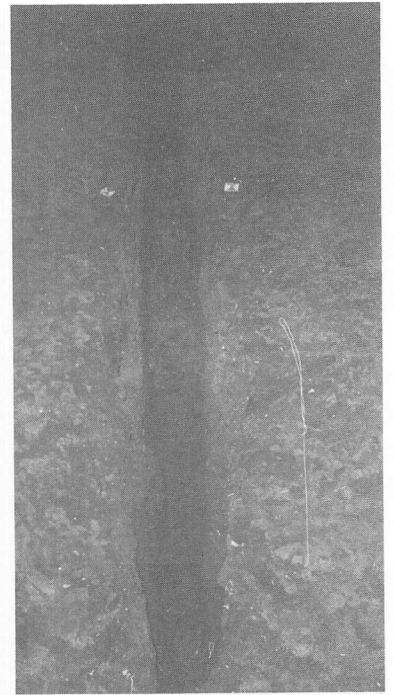
写真図版5 陥し穴状遺構



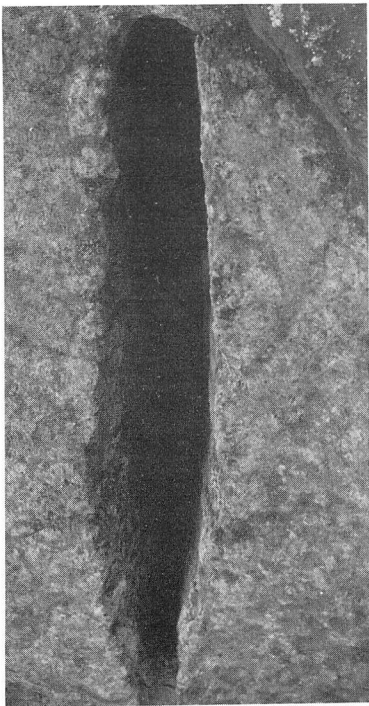
a. CI-4



b. CI-5



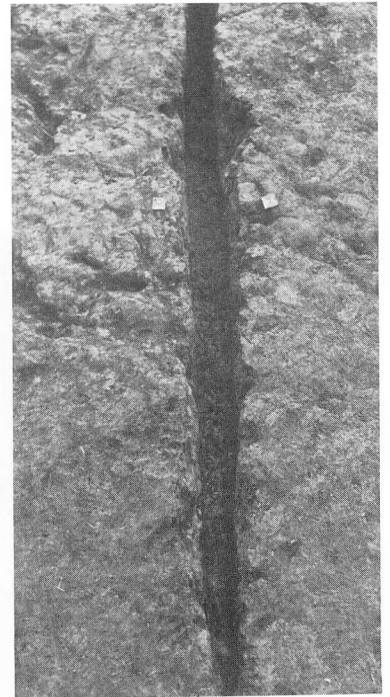
c. CI-6



d. CI-7

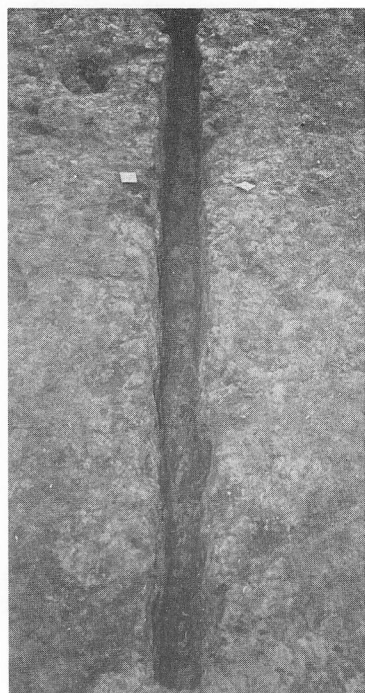


e. CI-8



f. CI-9

写真図版6 陥し穴状遺構



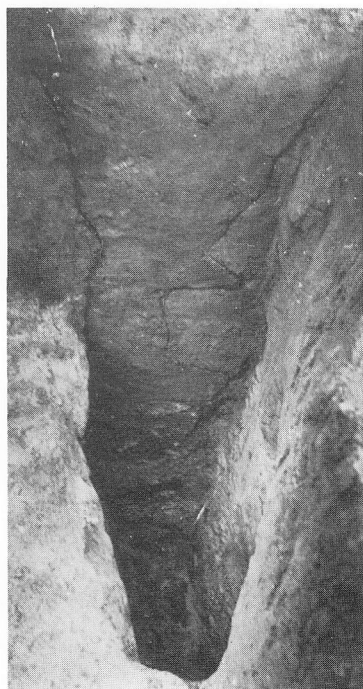
a. C I-10



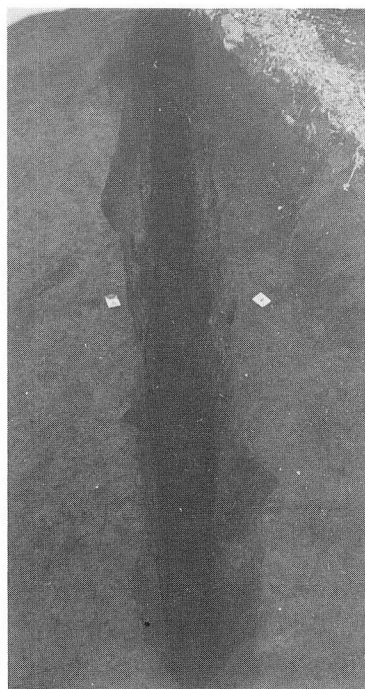
b. C I-11



c. C I-12



d. C I-13



e. D I-14

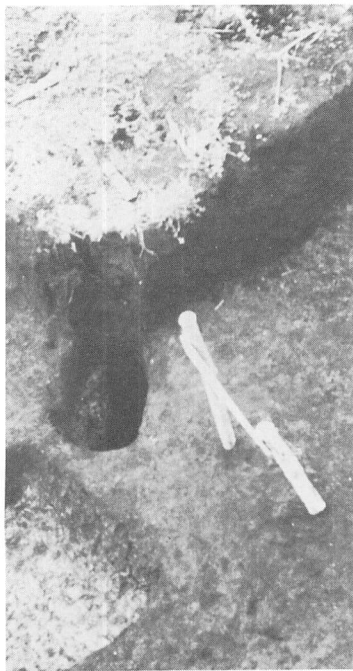
写真図版7 陥し穴状遺構



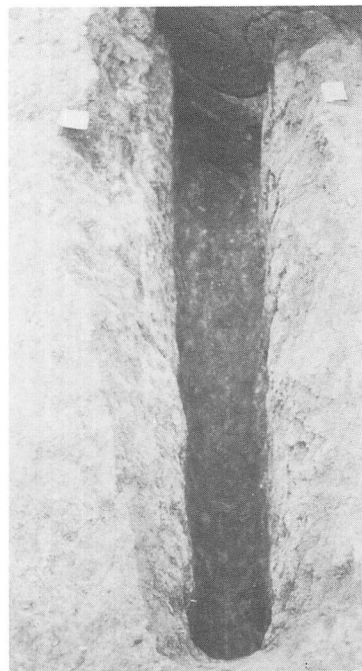
f. D I-15



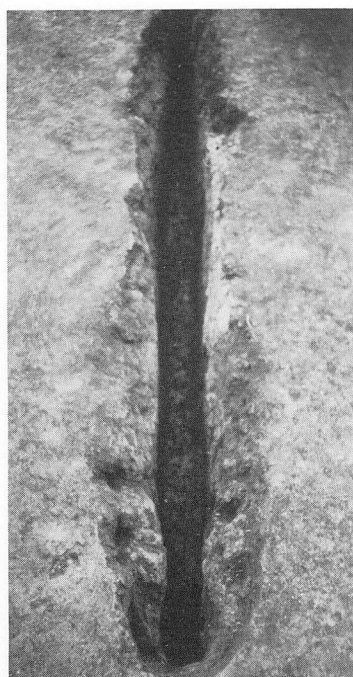
a. D I - 3



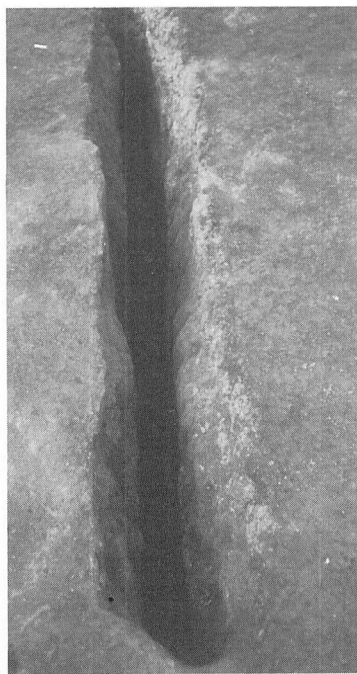
b. D I - 4



c. D I - 5



d. D I - 6

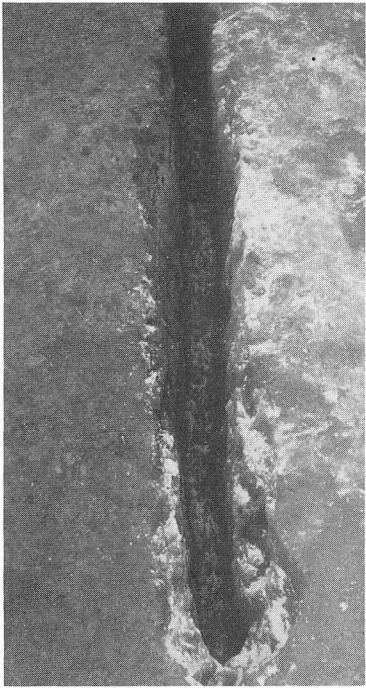


e. D I - 7

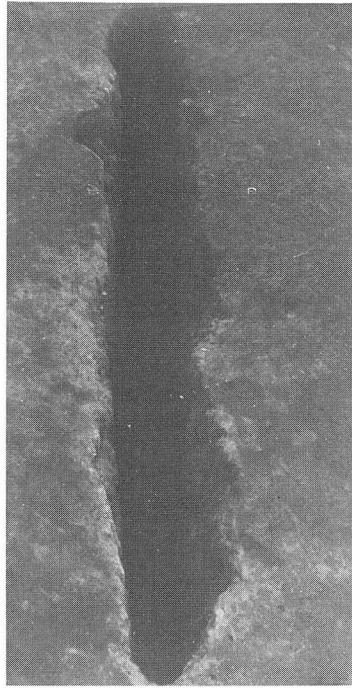


f. D I - 8

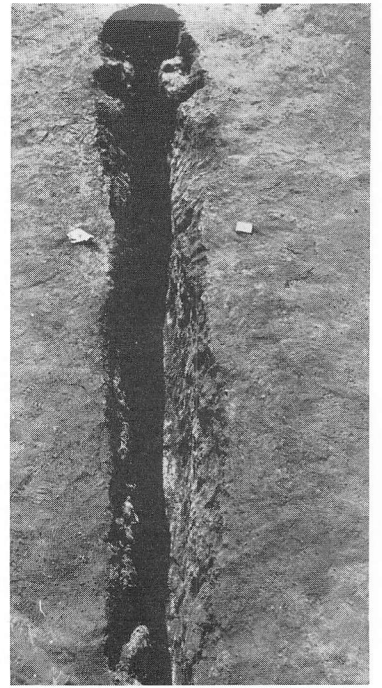
写真図版 8 陥し穴状遺構



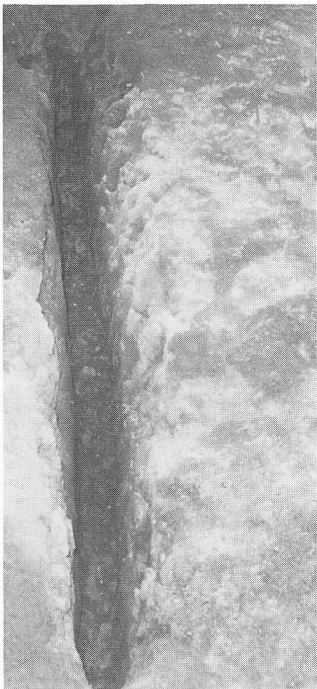
a. D I - 9



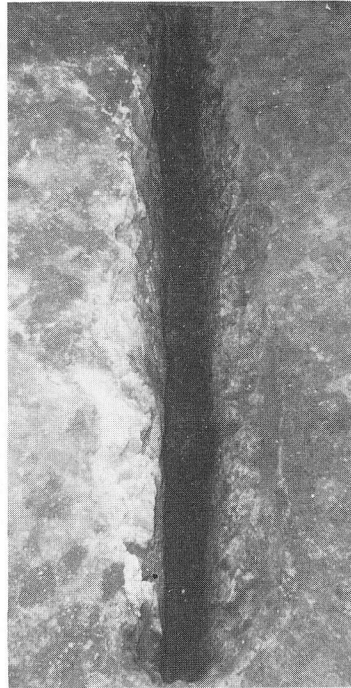
b. D I - 10



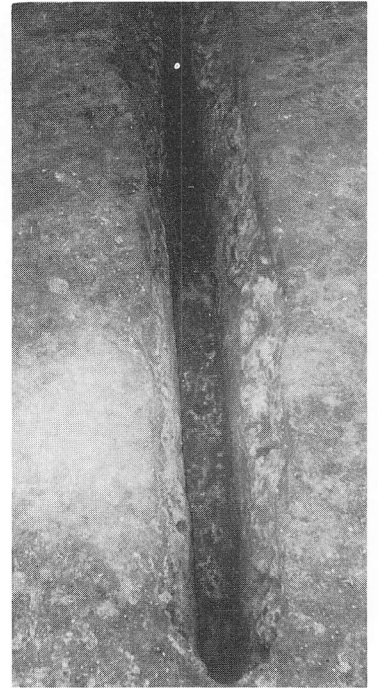
c. D I - 11



d. D I - 13

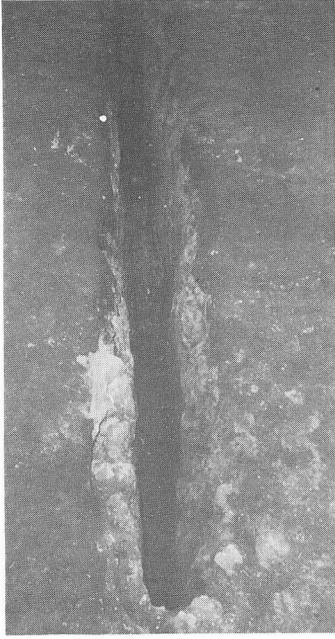


e. D I - 14

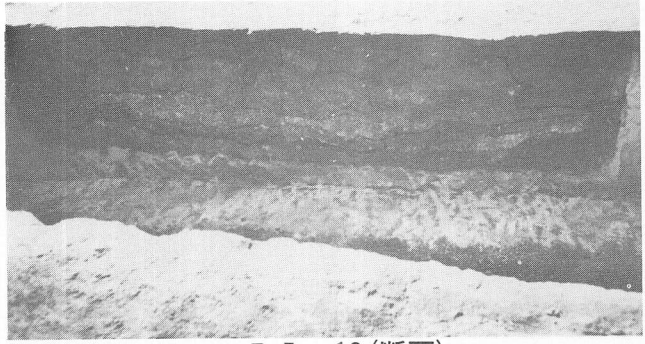


f. D I - 15

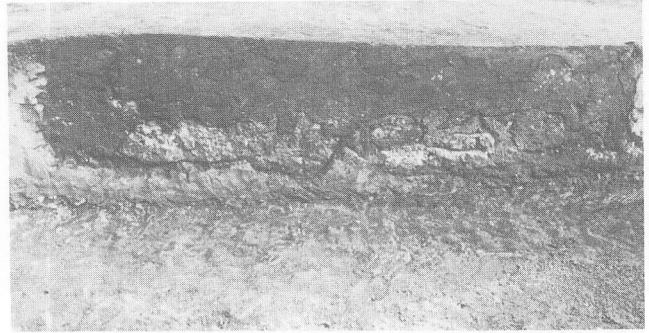
写真図版9 陥し穴状遺構



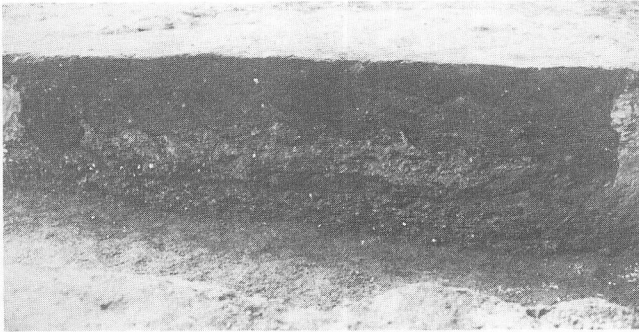
b. D I -16



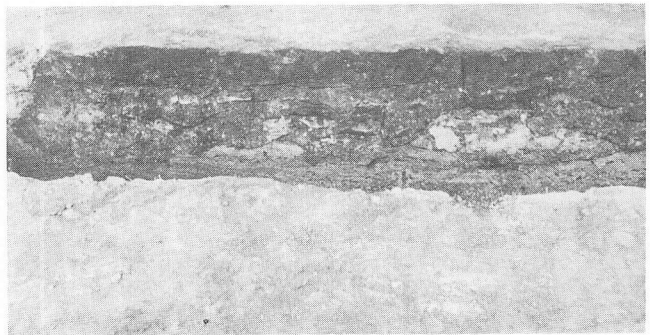
a. D I -12 (断面)



c. D I -17 (断面)

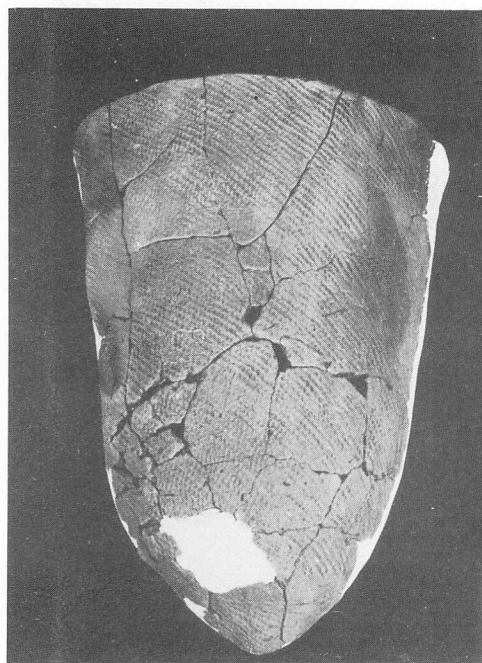


d. D I -18 (断面)

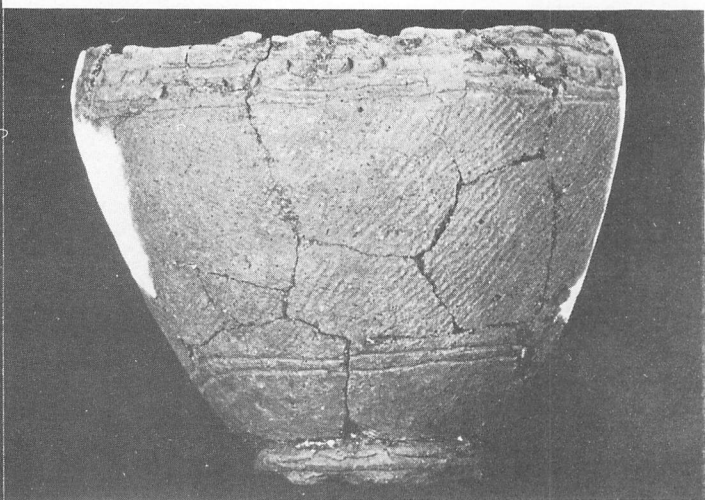


e. D I -19 (断面)

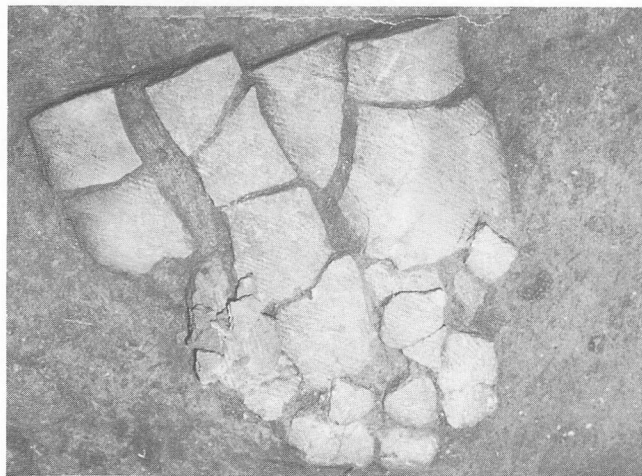
写真図版10 陥し穴状遺構



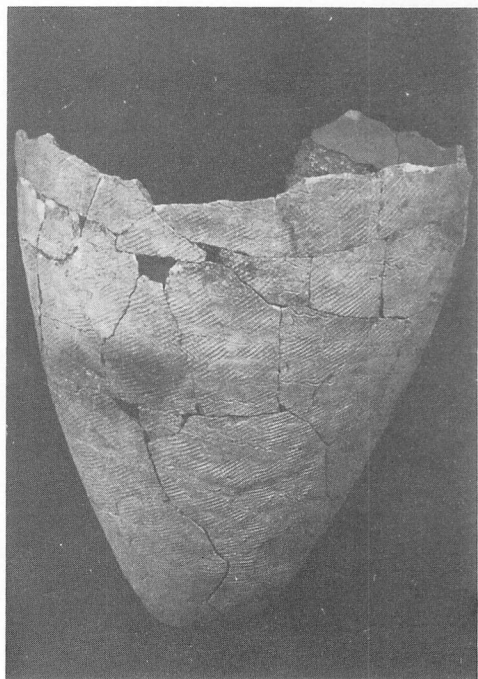
a



c

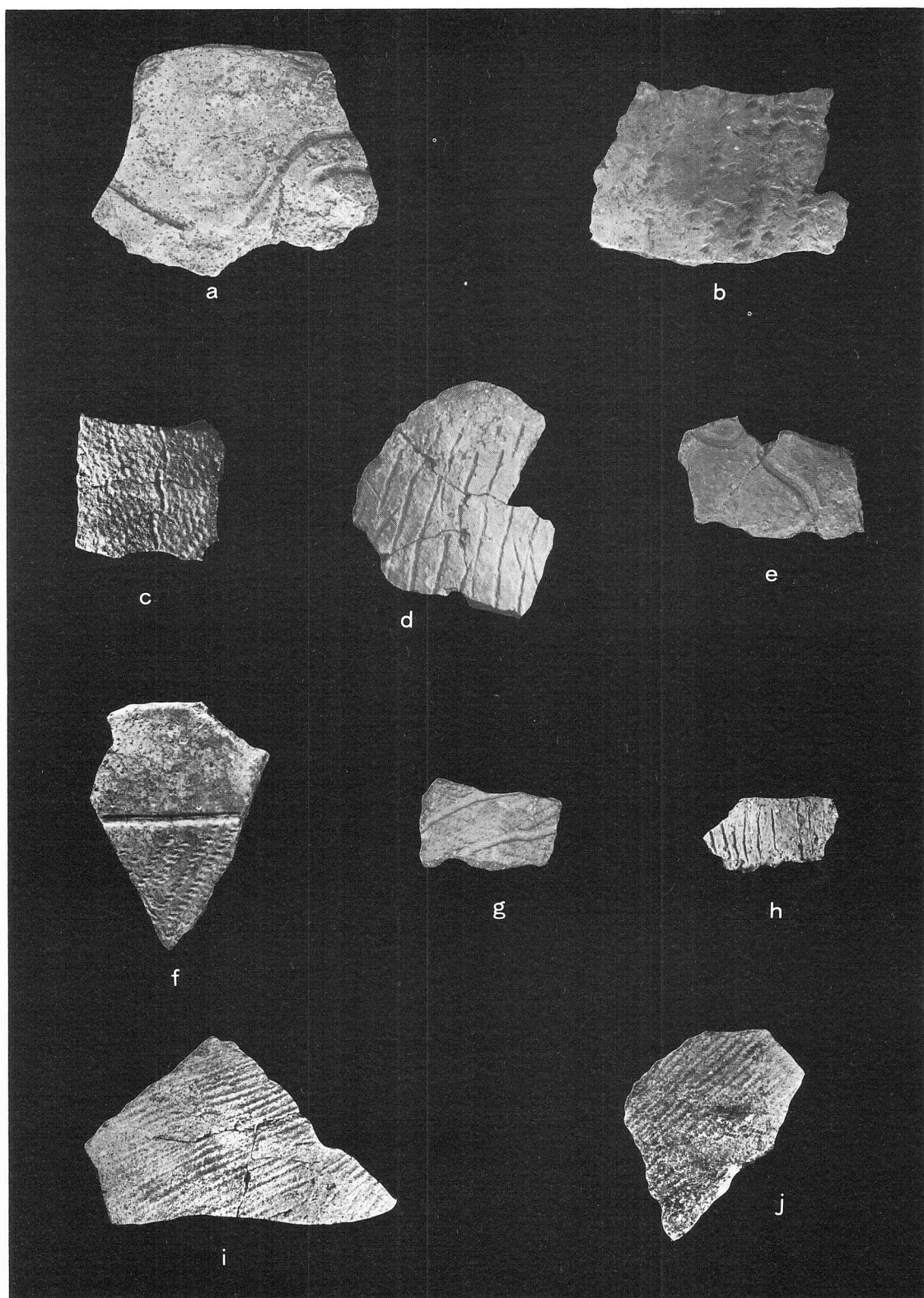


b. 尖底土器出土状况

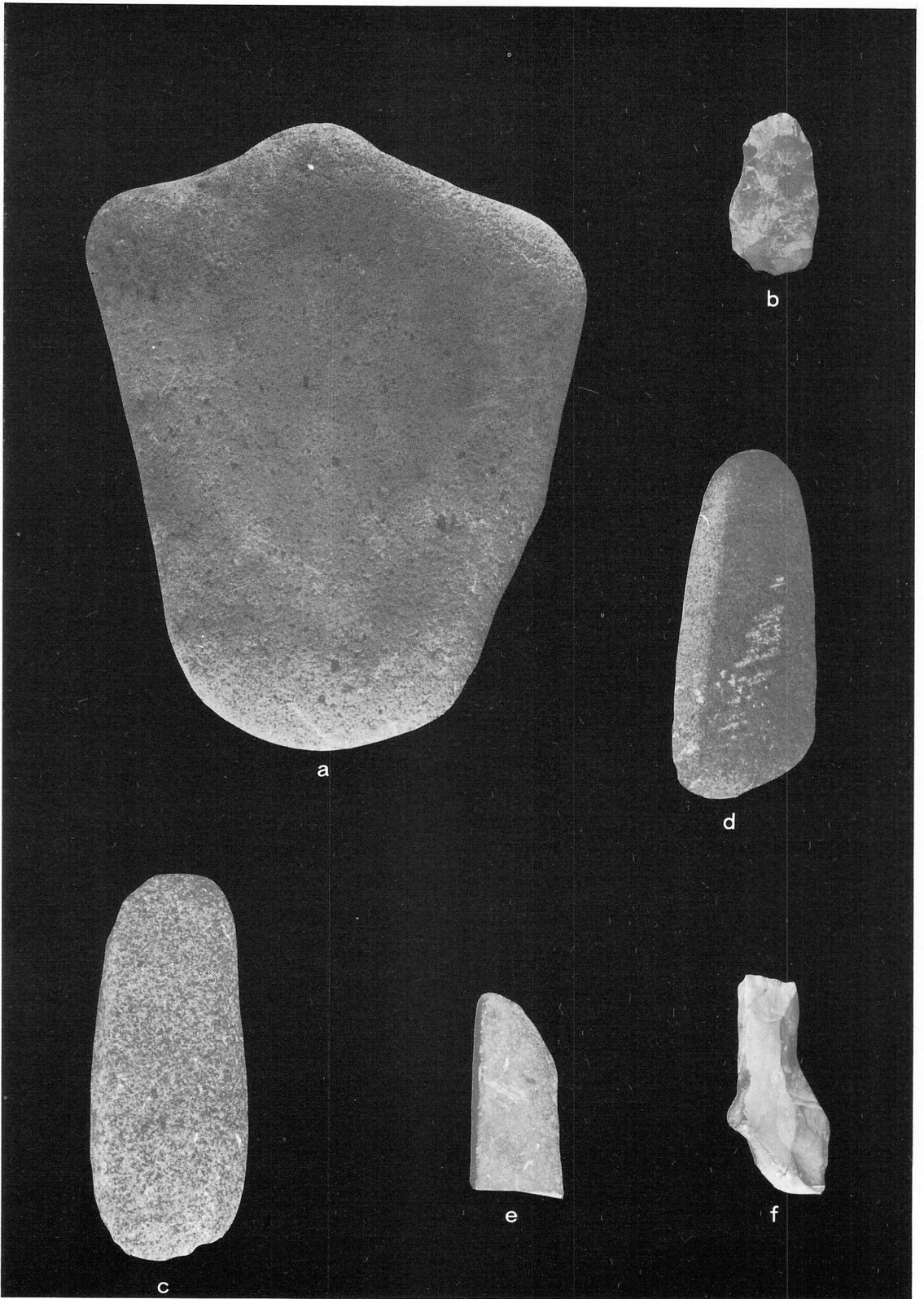


d

写真图版11 出土土器



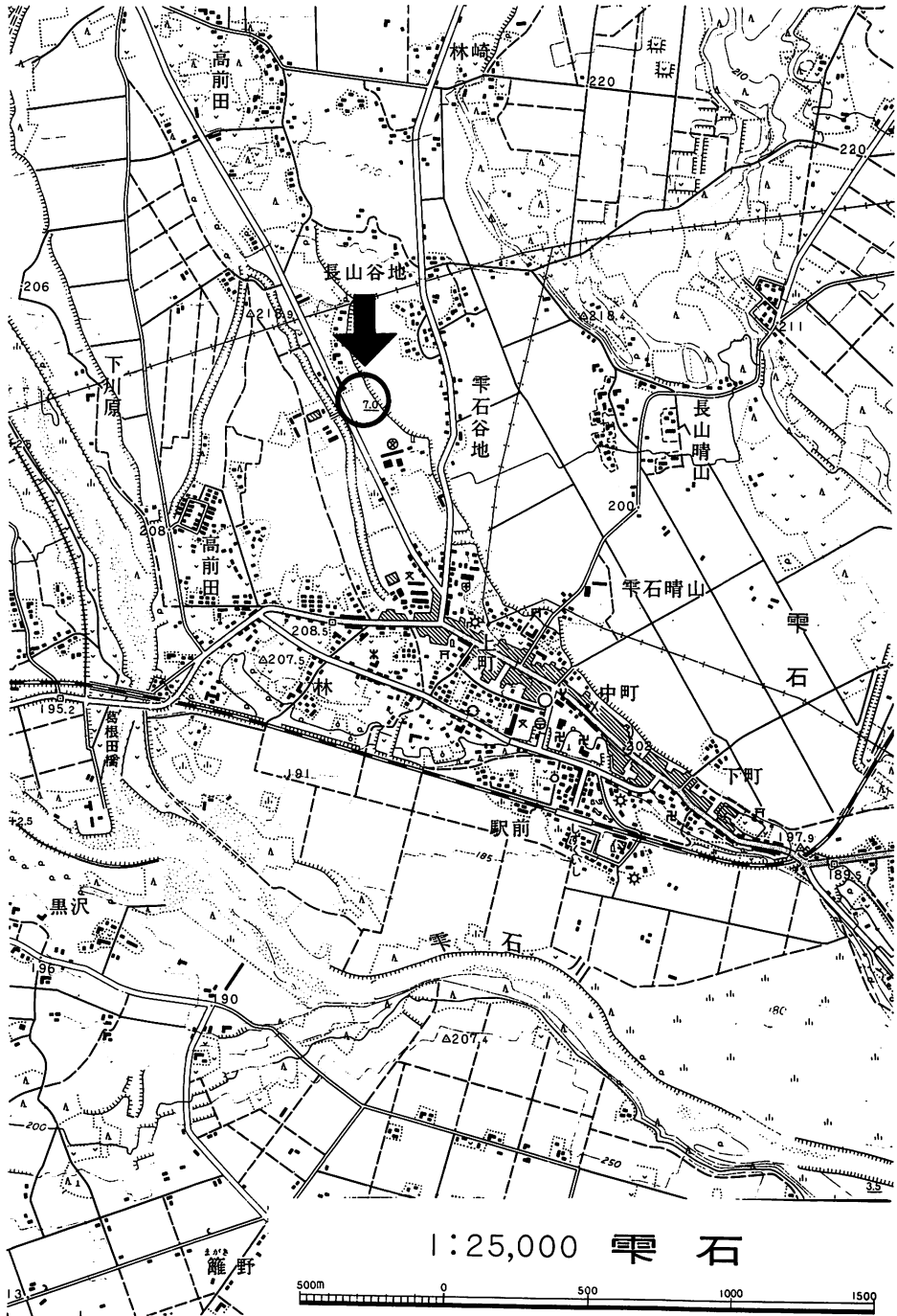
出土土器片
写真图版12



出土石器類
写真図版13

高 校 西 遺 跡

1. 遺跡所在地 岩手郡雫石町第36地割字柿木
2. 事業主体 建設省岩手工事々務所
3. 事業名 国道46号線雫石バイパス建設
4. 調査主体 (財)岩手県埋蔵文化財センター
5. 調査担当者 調査課長 瀬川司男、主任専門調査員 金沢光孝
技師 中川重紀
6. 調査協力員 小泉 修栄
7. 調査期間 昭和53年4月12日～5月15日
8. 調査対象面積 2,000㎡
9. 発掘面積 2,000㎡
10. 遺跡記号 KN78
11. 協力機関 雫石町教育委員会



図版 1 (高校西) 遺跡位置図

この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の 25 万分の 1 地形図を複製したものである。
 (承認番号) 昭54東複、第 84 号

I. 遺 跡 の 立 地

高校西遺跡は、国鉄田沢湖線雫石駅北西約1.3 kmに位置する。遺跡は七ツ森と総称される小規模な山群の西方にあり、雫石川の支流小河川によって開析された段丘縁に存在する。

遺跡の東側は急峻な崖となって、沖積面となる。西側は、雫石川市街地から葛根田地区を通り玄武温泉に通じる地方道によって、水田部と区画され、更に水路をはさんで、低位面と続く南側は県立雫石高等学校の校庭整地の為に削平されて、崖となっている。北側は遺跡立地面と同一段丘面が細長く続いている。標高202mである。

雫石町北部は、雫石川上流の葛根田川によって大きく開析され、八幡平・岩手山・奥羽山脈から流れ出る小河川によって細かく開析されておる。

岩手県遺跡地図によると、葛根田川流域における遺跡は、殆どなく、雫石川流域に固まっているが、地形的には、良好な段丘の存在することから、今後の分布調査等によって多くの遺跡が発見される可能性が強い。

周辺の遺跡としては、桜沼遺跡・下平遺跡がある。

II. 調 査 の 方 法

調査は、雫石バイパス路線内遺跡全域を全面調査する事とし、遺跡東端、西端にそれぞれ基準点各1点を設置し、基準点を結ぶ線を基準線とする事とした。

調査方法は、バックホウを用いて、全面に粗掘をかけ、作業員による遺構検出、遺構検出後においてグリッド設定を行ない、遺構精査を行なう事とした。実測については協力員の小泉を中心に作業員数名をこれに当てる予定であり、全体的総括を主任専門調査員の金沢が担当し、写真撮影は小泉が行なう事とした。

III. 標 準 層 位

表土層を含め、畑の耕作や、製材所建築のため攪乱を受けているが、基本的には、模式図の

様に分けられる。

第Ⅰ層 (暗褐色土) 層厚30cm土の耕作土又は製材所建築による攪乱層であり、腐蝕土を中心としている。全体的に締りがなく柔かく、粘性が少ない。所によって、第Ⅲ層が交じる事がある。

第Ⅱ層 (黒褐色土) 層厚20cm土で比較的攪乱が少なく、微粒の小石を含み、柔かくさらさらしている。

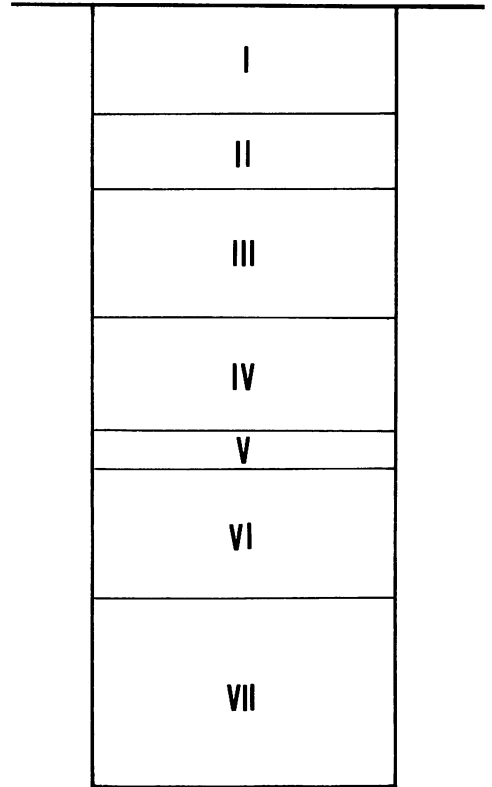
第Ⅲ層 (黄褐色土) 層厚35cm土で渋民火山灰を基調としたシルト層で、堅くしまっており、細礫を含む。粘性をもつものであり遺跡の基盤層となっている。

第Ⅳ層 (明褐色土) 約30cmの層厚をもつスコリアで、粒子が粗く、層位全体がざくざくし、剝落し易い。

第Ⅴ層 (暗青灰色土) 凝灰岩の風化土と思われる層で、層厚10cm土である。粒子は細かく、粒子は堅く、層としても堅く締っている。

第Ⅵ層 (明黄褐色土) 層厚35cm土の粘土層で、堅く締まり、粘性をもっておる。スコリアをわずかに含む。

第Ⅶ層 (明黄褐色土) 層厚50cm以上の粘土層であり、第Ⅵ層と同質の粘土層であるが含有するものが黒色細粒の火山性岩石を含むため区分をした。



$$S = \frac{1}{20}$$

図版 2 標準層位模式図

Ⅳ. 調査の結果

表土をバックホウで除去し、遺構検出に努めたが、基盤層である第Ⅲ層上面において、自然状態による凹凸は見られたが、人為的な掘り込み等は全く見られなかった。遺物は、第Ⅲ層上

面において、10数片の縄文土器細片が得られたが、いずれも土器体部片で、施文も磨滅しており、時期、器形もうかがい得なかった。

(瀬川 司男)

岩手県埋文センター文化財調査報告書第14集

雫石町 下平遺跡 高校西遺跡

(昭和52年度調査)

昭和56年1月20日 印刷
昭和56年1月25日 発行

発行 (財)岩手県埋蔵文化財センター
〒020 岩手県盛岡市向中野字向中野39-1
TEL. (0196) 35-6622

印刷 河北印刷株式会社
〒020 岩手県盛岡市本町通2丁目8番7号
TEL. (0196) 23-4256

© 岩手県埋文センター 1980
